

96-343

緒言

一本書は専ら中學校生徒が作文をなすに當り、座右にありて其資料に便すると同時に、作文の眞髓をも説明して、容易に是を合點せしむべく標準として編纂したるものなり。

一さればあらゆる文章の區別を立て、最も索引に便ならしめかねて古體の文と近體の文とも併せ例し、參酌に便りよからしめたり。

一各部門の最初に於て、各其文の類の説明をなし、傍らそを作る心得と大略の歴史とを併記し、讀むものなりて、其何ものなるかを合點したる後、作例を出す事としたり。

一 作例は是を古體、近體、言文一致等に區別し、然して古體より反て近體の方を多くしたるは、初學の士をして直接應用を得せしめんが爲なるなり。

一 作例を掲ぐるに當つて時代の變遷を知らしめんが爲め、通例國文學史が區別せる時代、即ち、奈良朝以前を除き、奈良朝、平安朝、鎌倉、足利、徳川、明治の六時代を趁ふて、大概其順序を正して是を掲げおきたり。

一 本書、散文に精にして、韻文に粗なるが如き觀あるは、まづ必要なるものを先にしたるを以てなり。

編者識

中學新作文目次

第一編 總論

文章とは何ぞや、文章を作るの要、文の主觀と客觀、

第一章 文の體

國文學、日本の國文學、奈良朝と平安朝、日本の漢文學、文體の種類、本來の一貫の文、近體文、其例、言文一致體、言文一致體とは何ぞや、言文一致の用ひらるる範圍、其例、古文、其例、古文と近體文、擬古文、其一例、近體文の三樣式、和文調、漢文調、譯文體、歐文の直譯、漢文の直譯、俗文、俗文と雅文、

第二章 文の種類

文の種類、文の質と形、質の二大別、正確なる分類、散文と韻文、

目次

第二編 散文……………元

散文とは何ぞや、散文の歴史、平安朝の散文と鎌倉時代の散文、平安朝散文の一例、鎌倉時代散文の一例、足利時代の散文、徳川時代の散文、散文を作る心得、

第一章 美文……………三七

美文とは何ぞや、美文の趣意目的、美文の種類、美文を作る第一義、美文と他の文との比較、美文の特質、敘事文との比較、美文を作る心得、美文に適する文體、

美文作例……………只

雅文

- 春の景色……………只
- 夏の景色……………只
- 秋夜笛を聞く……………三

流轉無常……………三

敘事的美文

- 實盛謀言……………三
- 足利忠綱の先陣……………三
- 笠置落……………三
- 山家の梅……………三

俳文

- 十八樓の記……………六
- 五老井の記……………六

淨瑠璃文

- 國性爺合戦……………七
- 源氏鳥帽子折……………七

近體文

- 櫻花を看る……………八

松島の記……………六四
 二尊院……………六六
 我が同窓……………六八
 文島日記……………九〇
 教會堂……………九二
 文……………九三
 言文一致……………九三
 荒れたる野原……………九五
 馬關の港……………九六
 洪水……………九七

第二章

論文

論文とは何ぞや、論文と美文、論文を作る心得、論文に適する文體、
 論理學の必要、論理の方法、歸納法と演繹法、論文の種類、論文作
 者の範圍、

論文……………九九

論文作例

古文

幸公は人臣の義務……………一〇七
 漢文の變遷……………一一
 世の變遷……………一二
 爲朝は大島に死せり……………二六
 源賴朝を論ず……………二八

近體文

松居松葉……………一三
 淨瑠璃と脚本の別……………一七
 石田三成論……………一九
 新年論……………二二
 言文一致……………二五
 公德と私法を論ず……………二五

第三章

敘事文

崇の字と其意味……………一三
 大坂市の歌を評す……………一五

敘事文とは何ぞや、敘事文と論文、美文と敘事文記事文、美文的敘事、其一例、實用的敘事、其一例、

敘事文作例……………一五〇

美文

子の日……………一五〇
 怪しき藤の花……………一五〇
 ふみ讀む人……………一五一
 月夜庵寺を訪ふ……………一五二
 熊王丸の事を記す……………一五三
 時雨……………一五三

實用文

蜂……………一六一
 日本の氣候と地勢……………一六一
 柿……………一六二
 海牛及鯨……………一六二
 世界の人類……………一六三

言文一致

田中正造翁の住居を訪ふ……………一六三
 トルストイ伯爵五十年の祝賀……………一六四
 奥州の鬼神……………一六五
 悲劇オセロの起原……………一六五

第四章

紀行文

紀行文とは何ぞや、紀行文と美文、紀行文の性質、紀行文及傳記文作例の必要、……………一六八

紀行文作例……………一五

雅文

- 土佐日記の一節……………一五
- 梁平朝臣の東下り……………一七
- 武藏野紀行……………一九

近體文

- 觀海日記……………一九
- 利根の夕暮……………一九
- 吉浦岬……………一九
- 宮嶽紀行……………二〇
- 大磯行脚記……………二〇
- 藥師詣……………二〇
- 東北輪行記(其一)……………二二
- 東北輪行記(其二)……………二二

第五章

傳記文……………二五

傳記文とは何ぞや、傳記文の特質、傳記文を作る心得、傳記文の種類、傳記文と論文、傳記文と漢文。

傳記文作例……………二六

言文一致

- 展覧と探勝……………二六
- 伊香保に遊ぶ……………二七
- 日光の裏山……………二八
- 十五日……………二八
- 豚鬮紀行……………二九
- 甲州の遊覽地……………二九
- 流寺の一日……………三〇
- 摩耶の一日……………三〇
- 信濃川を溯る……………三一

雅文

神武天皇……………二五

伊賀局……………二五

松下禪尼……………二五

近體文

高山彦九郎……………二六

楳保巳一……………二六

徳川光圀……………二六

佐久間象山……………二六

頼山陽……………二六

僧契仲……………二六

細川頼之……………二六

下河邊長流……………二六

齋藤彦麿……………二六

ルード井ツヒアルタ……………二六

高山樗牛……………二六

中村梅玉……………二六

片岡健吉……………二六

江原素六……………二六

第三編

韻文

韻文とは何ぞや、韻文の起原、韻文の沿革、萬葉と古今、韻文と詩、韻文の種類、三種の詩形、韻文の外形、韻文と散文との區別……………二〇三

第一章

和歌

和歌とは何ぞや、和歌の起原及沿革、和歌の詩形、古歌、古歌と新派、長歌と短歌、和歌を作る心得……………二〇八

和歌作例

古歌……………二三

新體詩

新體詩とは何ぞや、新體詩の歴史、詩形及約束……………三六

第二章

新體詩作例

野の光	三〇
石影獅子の賦	三一
農夫	三二
富中詩人	三三
砂上對酌	三四
花芥子	三五
勿忘れ	三六
自然	三七
わかれ	三八
櫻井	三九
新曲	四〇
俳句	四一
俳句の起原及其歴史、楳林派、正風派、日本派、俳句の詩形、	四二
俳句作例	四三
正風派	四四
日本派	四五

第三章

目次終

中學新作文

和田恒彦編

第一編 總論

文章とは
何ぞや

文章は人間の思想及び感情を文字の上に現すものなり、されば文を
みふみと訓ず、自己の見聞に映れる事象の相錯綜する綾の如き状を、
正し一見識むものをして、宛も自身蹈み見るが如き思あらしむるもの
自己の見聞に映せし事象の中には、單に科學的智識に依りて解釋す
るべく、はた亦單に感情に依りて、自己の思想を記述すれば足るもの
べく、更らに亦自己の思想に映りたる儘を記述するものもあるべし、

文章は思
想の表現
なり

文章を作るの要

文章を作る第一義

たる自己の思想を表現するといふ事は總べて一なるあり。されば文を作るには、總て自己の意を思のままに表す事最も必要にして、意は文のあらゆるものを通じて、心掛けるべからざる最要素あり、最も文の中には實用的のものと娯樂的のものとの區別ありて、其目的とする所異れど、共に意を達すといふ趣意は最も必要なるあり。

此故に文を作らんはどのものは、まづ其作るべき一編の骨子の、筋の一致を求して、然して其言ひ現さんとする事を、充分に言ひ現すべき手段を考る事肝要あり、要するに思想の表現といふ事が本にて、字句の洗練といふ事は末あり、されば一編の筋の成立ちたる後に於いて、美辭佳句を撰び、其思想の表現に趣味を加ふるものとす、然るに世には作文としいへば、直に生硬の美辭若くは柔弱の佳句を、無意味に臚列するものゝ如く思惟するものあり。

五〇六

文の主観と客観
主観とは何ぞや
客観とは如何
主観文の一例
客観文の一例

謬れりといふべし。

總て文を作るには、此本末を腹中に藏して、然る後紙に對はざるべからず。且つ記述する上に於ても、主観と客観の區別ありて、豫め是をも辨別し置るべからず、主観とは自己の見聞に映れる事象を、唯自分一己の思想だけに記述するものあり、客観とは自分の見聞したる事象を其まゝに映し出す事にて、是に自己の思想より産したる事を記述せざるをいふ、例へば論文の如きは多く主観あり、又敘事、敘景の如きは多く客観あり、論文は主として自己の思想に浮べる事柄を論らいて、其可否を定るものなればあり、されど敘事、敘景の如きは、自己の見たる景色の美醜や、自己の開たる事の顛末を叙するものなる故、自己の思想が産みたるものならねばあり、されど、這は文の體より區別を立てたる事にて、同じく論文の中にも亦此區別はあるもの

あり、文を作らんとするもの、先づ是等の點を心得置さるべからず。

第一章 文の體

國文學
如何なる國と雖も文學の存在せざる所なき

日本の國文學

凡そ如何なる國と雖も、其一國に共通すべき國文學といふもの、無き國は
あらざるあり、其國に太古より一系をなせる文學の存在せざる所あらば、そ
は野蠻國あり、文教のなき國あり、苟くも文明に觸れて制度あり秩序ある國
ありせば、國文學のなき所はあらじ、英國には英國文學あり、佛國には佛國
文學、獨逸には獨逸國文學、露國には露國文學、支那には支那國文學ありて
皆夫々一國特有の文學をなすつゝありて、語格より文法に至るまで、また夫
々特異の殊點を存す。
然して我日本も亦、此例に洩す、一國に特有の文學ありて、上古期即ち神代

文學の源

奈良朝と平安朝

萬葉集

平安朝の文學
物語類
家集、勅
撰集、勅
撰の五
歌仙は五
清原元輔

の昔素戔嗚尊が「八雲たつ出雲八重垣妻むめに、八重垣造る其八重垣を」と
歌ひ給ひしより文字は多くとも、思想及感情を現すべき文學はありて、歌謡
祝詞などに其基を拓き、奈良朝に至りて弘法大師が作りしと傳説せらるゝ、
いろは四十八文字の國字を作製せられ、其以前には萬葉假名と稱する漢字の
音韻によりて假りに讀ましめたる文字ありたれど、茲に始めて我國特有の文
字でき、文學も歌謡祝詞に留らず、古事紀、日本紀の如き大冊の散文、萬葉
集の如き長歌、短歌を集たる歌集も出で、増々國文學の脈絡を深からしめ
躍いで、平安朝には紫式部、清少納言の如き才媛輩出し、源氏物語、枕草
紙などを著し、一方紀貫之を始め梨壺の五歌仙の如きが、家集、勅選集など
を選み、鎌倉時代、室町時代を経て、江戸時代即ち徳川氏の世に至り、以て
明治今日の盛を見るに至れるあり、然も此永き歲月の間、發達進歩の脈絡は

決して絶る事なく、綿々として續を惹きたる如く、其持續を保ち來りたるあり。

されど我日本は、古く應神天皇の朝に阿直岐、王仁を以て今の朝鮮の一部分當時の百濟より來朝して、論語、千字文を以ていふ支那の文學を輸入したる爲早くより固有の國文學に並んで、漢文學の旺盛を來し、江戸時代に至つては藤原惺窩、林羅山を始として、朱子學派、古學派、陽明學派等、皆夫々一大頭梁を出し、今日に至るも尙は多少漢文學は、專問の一科として存在し居れり。

従つて文體の如きも、其影響を受けたる爲め、古來より和文(國文學)、漢文(支那國文學)の二派に別れて並立し、夫より徳川時代二者の勃興に伴て、和漢二派の折衷體をも出し、頗る複雑のものとなり行きぬ、殊に明治の世となり

大中臣能宣、紀時文、源順、坂上望城の五人也

文體の種類 時代と文體

ては、歐西文明の輸入に伴つて、其思想の傳播せらるゝや、西洋文の加味せらるゝ體もいできて、増々複雑を加へぬ。

故に今日に於いて文を作らんとするもの、其體の撰擇に迷ひて、何れに歸するかを知るに苦しみ、爲めに鶴的の文を作成するものあるを見る、初學の士の爲めに大體の歸趣を説明し置くの要あり。

然し亦が斯く複雑したるが如しとはいへ、日本本來の國文學は、一定の徑路を踏み來つて、其時代に適應し、一定の文體は成されあり、或は古文といひ、擬古文といひ、雅文といひ、俗文といひ、和文調といひ、漢文調といひ、直譯體といひ、言文一致體といふと雖も、明治時代には明治時代を一貫せる文體の自ら存するあり、さるを時世の進歩に伴つて、文學の稍々普及せる爲、自然複雑の現象を生じ、爲めに撰擇に苦しむに至る。

本來一貫の文體

文體の異なるは時代の反影なり

初學の士の選むべき文體

近體文

近體文例
ナイヤガラ
の瀑布
は北亞米
利加にあり
第一と稱
す虹飛龍

されば初學の士が學ばんとする文體は、其現代に多く用ゐらるゝものを探るを可とす、然りと雖ども、文に依りては、亦他の體を撰ばざるべからざる要あり、そは後に文の種類しるるの各項かくうに就いて、一々説明對照せつめいたいせうすべければ、今茲には是を略して、大體文體の事だけを記述すべし。

近體文の普通に行はるゝものは、純然たる和文調にもあらず、亦純然たる漢文調にてもなく、語格ごかく文法ぶんぽうすべて文の法則はふそくは日本古來の規定ていぎんに従ひ、間々漢文調を交へたるものが現代の文體にて、例へば

● ナイガラヤ瀑布之記

小幡篤次郎

ナイヤガラ瀑布は、世界中の最大瀑布にして、雄偉壯快、遙に人の意表に出で、白虹飛龍の比喩を以て、其眞景の萬分の一を形容する事能はず、故に歐亞の文士、詩人、接踵して杖を爰に曳くもの、皆筆を抛

白龍飛びたる形容なり
小幡篤次郎氏は選族院勅選議員に義塾の長なり
言文一致の創始者
言文一致の沿革
何體と一致の如し

ち、稿を裂きて、雷吼隱々の中に黙々し、未だ替て人口に膾炙するの佳句妙文を寫し出す事能はずといふ。(其一節)

爰に示したるは、即ち其一例にて近體文の普通なるものあり、尙此外に全く明治時代の新産物として、言文一致體といふが行はる。

言文一致體は現代文章界の新勢力にして、始め山田美妙氏が、是を小説に用ゐたるものにて、爾來嵯峨のやむる、尾崎紅葉兩氏の新工風に依りて、一層其體、其調を完全にし、今日にては、殆んど文章界の四分を占守するに至れりといへども、自ら其用ゐる範圍に限りありて、全體を通ずる所までには至らざるものゝ如し。

言文一致體は、もと詞即ち言と文とを一致せしむるものにて、口語を文章語に引直す手敷を除き、通用語其儘を文章とすすものにて、這は西洋をどにて

言文一致の標準語

言文一致の用ゐらるゝ範圍

言文一致の一例

は、總べて言文一致あるにより、其思想を受けて、時世に適中あるべく創始せられたるものあり、されど其言あるものには、土地々々の口語に差を生じ訛さのある爲め、一定を缺くにより言の標準を定め置くの要あり、今日にては言文一致の標準語は、多く東京の中流以上に用ゐらるゝ口語を標準語としたるものあり。

今日にては言文一致體の用ゐらるゝ範圍、多くは純文學者、若くは著述家の間に勢力あるものゝ如く、廣く一般に用ゐられず、されど間々日用文などにも用ゐられて、今後増々其範圍を擴張せらるべき見込あれば、今にして文を學んとするもの、近體文として此一體をも習得しおかざるべからず、今一例を擧ぐれば

●屏風山の記

田村松魚

「田村松魚氏は幸田露伴氏の門より出て青年小説家として博文館編輯局に有る文藝俱樂部の編輯に従事す」

名を其儘、屏風山は、青壘を敷き詰めた様を海原に屹立つてゐる。中に二雙の大岩石、恰かも櫓を手にして波を切つてゐるやうなのが男體岩、それに竝んで稍々低う、裾を掲げて貝を拾つてゐるやうなのが女體岩である。此二つの岩の頂に、何れも西の方渺々たる波濤を白眼んで、ある、一つは雄、一つは雌、何れも西の方渺々たる波濤を白眼んで、不斷の潮風に吼るかのやう、その額より、頤に至るまでの顔面は殆んど一丈もあらうか、眼とも思はるゝ岩の瘡の周圍には白苔長へに蒸し中央に一點、金色をなせる光輝を放つは、鋭き瞳を射る如くである。岩の根方に雄波雌波が、晩春の静閑に和するかの如く寄せて返して、マヤブシ、ぐぐといふ音を立てゝは、雪と飛び玉と碎くる潮の花の間斷もさう美しい。(小説珊瑚船)

言文一致
の特質

明治時代の
文體

他の文を
參照すべ
き場合

古文

古文の例

是が言文一致體にして、其特質は事象を捉へて、直ちに描寫するにあり、然して尤も平易に、尤も通俗的ある殊點を有するも是あり。

此二つのものは、明治時代に行はれつゝある。近體の文なれば普通文を作らんとあらば、此文體に倣ふを可とす、然して更らに進んで、記述に使はる爲他の文體を習ふべし、尤も他の文體は多く専門家の用ゐるものなれば、中學生を普通の學を修むるものは、あまり其要を認めず、されを場合によりて趣味ある文、例へば美文の如きを作らんとする時には、他の文體を用ゐるも宜し、されを其用を誤らざるやう注意すべし。

古文とは、現代に餘り用なきものにて、たゞ國文の咀嚼として、時に娯樂的作成するものあり、例へば

● 春の雪

清少納言

つもどり
はつきり
たりを略
たりたるに
て時日の
事なり
「清少
言は清原
元輔の女
なり式
部と共
一條天皇
の妃に
門院上東
へて才名
あり「
御いらへ
といふ事
いふ事
うへのお
はし主上
ては主上
の御座あ
るをいふ
おほこの

二月つもどり、風いたく吹て、空いみじう黒きに、雪少し打ちりたるほど、黒戸に主殿の司來て、かうして待ふといへば、よりたるは、公任の君宰相中將殿のとあるを見れば、ふどころ紙に、少し春ある心地こそすれ、とあるは、げに今日の景色に、いとよくあひたるを、是がもとはいかでつくべからんと、思ひわづらひぬ、誰々かと問へば、それ〜といふに、皆恥かしき中に、宰相中將の御いらへをば、いかで事あしびにいひ出んと、心一つに苦しさを、御前に御覽せさせんとすれども、うへのおはしましておほこのごもりたり、主殿の司は、とく〜といふ、げにおそくさへあらんは、とり所あければ、さればとて空さむみ、花まがへて散る雪にと、花泣く泣きてとらせて、いかゞ見給ふらんと思ふも詫し。(枕草紙)

●春の曙

紫式部

明け行く空は、いといたう霞みて。山鳥ども、そこはかどなく、鳴りあひたり、名も知らぬ木の、草の、花ども、いろくに散りまじり、錦を敷けると見ゆるに、鹿のたどすみありく(歩)も、珍らしく見給ふに、惱ましきも紛れ果てぬ。(源氏物語)

これは古文の例にて、今より殆んど千年以前の文章あり、近體文として明治現代に於ける文體を擧げたる如く、平安朝時代に於ける當時の文體ありしあり平安朝時代にありては、斯くの如き文章が、専ら行はれたるあり、されば古文といふも、這是現今より見て附したる名稱にして、現代の文體とても、今後幾百年、幾千年を経るば、如何に變ずるやも計られず、されば文を學ぶも

ごしりと
は大殿能
なり
いといた
うは強く
なるとい
ふ意
紫式部
は原部
時の女に
ての女に
官孝に嫁
し孝に嫁
ありて夫
東門後上
東門後上
從信任に
甚だ厚く
然朝の淫
原なる中
に介する
卓然と中
て卓然と
守の

名識し
なり
なり
擬古文

其一例

あはれは
感動詞と
て物に感
動するに
あはれは
すばる詞
はばる詞
あはれは
あはれは
あはれは
あはれは
あはれは
あはれは

の、ある一體として、這を參考するの要あり。
擬古文とは、近古鎌倉、足利及元龜天正時代戦亂の後を承けて、徳川時代に勃興したる國學者が、盛んに古學を唱導し、其訓詁註釋に汲々たりし當時此時代の文體に擬して文章を著したるが即ち擬古文あり、されば現代にても此時代に溯つて其文體を擬作すれば即ち擬古文あるあり

●知足庵の記

村田春海

あはれ、世の習しこそ、はかあきものはあまれ、高き賤しき、品いと異れりといへども、あのがじ、心行くばかりあるは稀にて、唯足はぬ事のみぞ多かりける、花を思ふとては梢の嵐を怨み、月を愛づるとては、尾上の雲を厭ふためし、誰かは逃るべき、林に宿る鶺鴒は、僅ち

儲は已が
ふ車宿る
林鶴云々
人よし古の
はれまひで
師は好法
草に徒然
中村の主
席の主人
一海は村
入村の春
道の子に
下つてを
好み長を
て好むに
騎賀波真

る小枝の陰をのみ頼み、流に水求むる風は、唯腹膨るゝに過ぎず、とこそ古の人もしひつれ、かゝる理をだに別たば、限ある此世に、限りなき事を思ふべきかは、茲に中村の主さん、よく塵の世の汚はしきを逃れて、萱が軒、松の扉に、心の月を澄しめ、花を摘む夕、あかを汲む曉、御佛に仕ふる暇ある時は、氷を碎き、雪を煮て、桐尾の背を偲ぶめる業にしも、心をふん慰めける、是れや此世に求むべき。(季後集)
以上記せる古文、擬古文は、共に我國文の純あるものとして、更らに他國文の接觸を受けざるものなれど、近世に至りて和漢兩文を折衷したるものあり前例近體文の一例として、引用したるものゝ如きは、此脉に屬するものなり然して此折衷體の中にも、漢文素の多きものと、和文素の多きものと、兩者相宜しきを得たるものと三様の區別あり、其漢文素の多きは即ち漢文調にし

入りの門に
千入り並
びて歌人
の名あり
近體文の
三様
折衷體
各種文體
の特質
和文調其
特色
和文調の
例

モスカワ
は露西亞
の蕃部

て、和文素の多きは和文調あり、然して兩者宜きを得たるものは現代普通に
行はるゝものなり、三者は皆文の種類に依りて、夫々其用を異にす、例へば
和文調は美文に適し、漢文調は論文に適し、普通文は敘事に適するが如きは
あり。
和文調は多く小説、美文に適す、故に現代にても、紀行文、小説、隨筆等の
如き、詞藻の上に重きを多くものは、多く體を和文調に取るあり。

●ニエメン河

小島無角

ニエメン河の邊、路は細う疎林のうちにつらき、あたりは遠く武士の影絶えて、村落幾戸の煙は、酷しきモスカワの掟を嘲ける如く、遅々として末は行衛を知らず、里の南、小高き丘のうへに、貧しき家あり

扉破れて、風はすげまう其隙間を音をへど、老婦が温かき情に、心安
けく病に臥せる少女あり、今しも老婦は其前に跪きて少女の爲に神
に禱りぬ。(帝國文學)

更らに漢文調は、漢文の間に假字を交へて邦文とあしたるものにて、尤も議
論をその文章には、其特質としてよく適す、されど現今にては、漸く漢文排
斥の聲高まるにつれて、久しく其用をさるぬに似たり。

● 鷓 媒 記

國府 屏 東

方瀛仙は、揚州甘泉の諸生にて、世々鹽菜の利を擅にし、貲を重ぬ
る事鉅萬ありしも、生に至りて積に居る事を好ず、一切盡く是を人に
委ね、唯日に書籍字畫、金石彝鼎を購ひて自ら娛めり、別業は廣儲門

漢文調其
特色

例 漢文調の

「國府屏東
東氏は支
那文學に
精通せる
人今博文
館にあり
て雜誌太
陽の編輯
に從ふ」

書籍字畫
金石彝鼎
屏東の骨
日木の骨
董好の人
の事也
泉石亭台
の勝は別
莊の庭に
泉水や亭
なだあり
て景世よ
き事
聘せずは
妻を娶ら
ぬ事
漢文の佳
句

にありて、泉石亭臺の勝を具へり、盛夏に遇ふ毎に、輒ち往いて暑を
銷しぬ、園に近き事數十武、林氏の居たり、林も亦宦家ありき、女あ
り雙影といへり、詩詞に工にして容貌に美ふるより、才艶一時に噪し
時に生未だ聘せず、頗る意を女に屬せしも、特未だ一見する能はざる
を憾事とせり。

こ
這は直譯にして、漢文邦を文に譯したるものなれど、亦以て漢文調の如何を
るものあるかを知るを得ん、斯の如き文體は、今より十數年以前は、盛んに
文章界を風靡したるものにて、今も尙美文の佳句として。

夜寂々として燈火明滅し、四隣聲なく、唯蟲聲唧々として叢中に咽ぶ
時、悠然として起ちて窓を排すれば、天籟袂に入り、明月老松を照ら
して清影婆娑たり。

十里の長堤落葉聲あり、滿月蕭條として秋風蕭瑟を吹く、春光九十今何處にかある、眼を放てば夕陽紅を曳くの邊、富岳屹として天地に繋る、正に是れ極彩の好畫幅。

此の如き文章は所々に用ゐられつゝあるあり、共に皆漢文和譯より一體をあたしたるものにて、譯文體と自ら其選を異にす。

譯文體とは西歐の文章、若くは支那其他の國の文章を日本の文章に譯したるものを指して名づけたるものにて、是には直譯體と翻譯體との別あり、されど翻譯體は全然日本の文に化したるものなれば、今茲に説くの要を認めず、單に直譯體のみに就いていはす。

「君は舊き我學友にてはあらぬか」と男はいへり、「げにこそあるべし。君が名は」「ツムラン」、げにく、君は我と同じ學級にありし人

譯文體
直譯體
歐文の直

あるよ」「あゝ舊き友よ、我は、一目に君とばそれと見分けたるあり」。這是歐文の直譯體なれど、更に漢文の直譯を見れば

●赤壁の賦

蘇東坡

壬戌の秋七月既に望す、蘇子客と舟を泛べて赤壁の下に遊ぶ、清風徐に來りて水波興らず、酒を舉げて客に屬す、明月の詩を誦し、窈窕の章を歌ふ、少時にして月東山の上に出づ、斗牛の間を徘徊す、白露江に横り、水光天に接す。

されど直譯體の如きは、もと一定の形あるにあらず、然して唯原文を損せざるやうにあすものなれば、文として左程の價值あるものもあはえず、文學もの是等は單に一の參考として、記憶に止めおかば可あり。

漢文の直
既に望す
とは月が
滿月とな
りし事
直譯文に
は約束な

俗文

俗文作成の困難

尙茲に俗文と稱するものあり、這是専門の人士に限りて用らるゝものにて、普通學を修むる士等には、さして必要を感ぜざるべし、且つ俗文は其文體卑近にして、通俗なるにも係らず、是を作成するは、よほどの修養を積みたるものからでは叶はぬ事にて、文章の躰裁、字句の洗練、共に頗る難事に屬す、所謂舊時の洒落本、御伽草子、戯作、現代の端唄、三絃の唄ひ物などは皆此種の文章あるあり。

俗文の例

「淺井了意の本性寺住松子」

●神奈川の宿

淺井了意

町のはづれ、右の方、道ばたに、武藏相摸の境あり、坂の下に中村といふ町あり、樂阿彌申けるは、始めて此街道を通るものは、茲にて餅を食ふものぢや、此故に此坂を焼餅坂と名づく、先づ休みがてら茶屋

俗文と雅

「めきては事呻吟する

寛永十四年より四年に生る長き代徳川時著先達と人なりし人のなり」

に腰かけ、焼餅をも食ひ給へとて、男を連れて茶屋の内へ入りぬ、家の内汚くして、茶屋の唄も顔のかゝり荒くもうして、貝殻のやうに見ゆ、然も顔さかある女房ありければ、男如何にぶあしらひ茶店のお唄じやといへば、只今亭主と口論侍りとかたる、男とりあへず「家はむさし、さがみる人のかほつきに、是や女夫のいさかひの阪」と讀みて焼餅を食ふ、樂阿彌此歌の返へしをせばやと思ひ、うめきすめきて案じつゝ、餅も食はず、やうくかくぞいひける、「むさしとて、家のかゝみる人は、いさかいはてもちさりの餅」此阪はむさしのかみの境あるをよめるにや。

這是萬治年間頃の戯作にて、今より二百年ほど以前の俗文であるが、現代にても尙大體に於いては大差なし、但し俗文とは眞面目なる高尚の文章、即ち雅

文といふに對して卑俗の文なれば、かく稱呼を與へられたるものにて、何れの時代にも、此二様の體は、文の質として存在するものあり。以上述べたる所、即ち文の體の大體の種類あり、尙此外に幾多の異りたるものあるにしもあらねど、そはさほどの必要を認めざるにより是を略したり。されど、這は文を作るものゝ爲めに、其體の種類を擧げたるに過ぎぬものなれば、必ずしも是等を習得するには及ばず、否全く其要を認めざると共に複雑混亂の虞あるにより、這はたゞ參考として胸腹に藏するを良しとす。

第二章 文の種類

前章に於て文體の大別をなし、是を説明したるにより、第二編以下に於いて作例を示し、且つ其種別を立て、初學の作文資料に供すべき前提として、

文の種類

文の形と質

構想と修辭

文の形質

二面
形と質との區別

本章には文の種類を區別して、其大體を説明せん。

前章の文體といふ區別は、文の形式の差にして、其内容即ち質の上の區別にはあらず、凡そ文を作るには、修辭學上に所謂内容と外形即ち想を構へる事と、辭を修むる事とを區別するを要す、文體はともあれ、構を想へるといふ事は、内容即質の上の事なれば、前章に説たる體の區別の如きは、外形に屬す質同じうして、體の異なるものあり、體同じうして、また質を異にするものありて、到底此二者の區別は、永遠に必要を感じるものあり、されば體を區別したる以上は、また質の上の種別をもあさざるべからざるなり。

同じく論文を作りても言文一致あるあり、漢文調あるありて、其體は一致せず、作るものゝ、撰擇に任せざるべからず、然して其成りたる作物の形に言文一致體と漢文調との差を生ずるとも、主題の思想に同一なれば、其文の

意は一あり、是に反して形は同じく言文一致體といふと雖も、其思想にして論文と美文との差あれば、這是根本に於いて其質を異にするものにて、一は或る事象を論ずるが其文を通ずる一篇の趣意、他は事象を趣味化せんとするが、一篇を通ずる趣意あり、此故に文に形と質との二面を生じ、其兩面の區別を見る必要あるあり。

文の種類、即ち質に依りて區別するものには、大體に於て是を二大別する事を得、曰く散文、曰く韻文、然して更に散文を細別して、是を美文、論文、敘事文、紀行文、敘情文と記事文、傳記文、敘景文などに區別し、韻文を細別して、和歌、俳句、新體詩などに別つ事を得べし。

然しながら這是嚴重なる意味の分類にはあらず、同じく美文といふと雖も、美文の中には亦小説もあり、戯曲もあり、紀行もあり、敘情もあるあり、敘

質の二大別
散文と韻文

正確なる分類

嚴格なる區別

散文と韻文の區別

事の内にも美文もあり、實用文もありて、記述の事象に依りて其類を異にすれば美文は自から諸種の文質より離れたる大體の一種されど、籍は是を散文に列せしむるを可とす。

のみならず、記述すべき事柄の差に依りて、更らに其筆致に徑庭を生じ、愛にも尙幾種の分類を見る、例へば山野の景色を寫して是を敘するものは敘景文にして、這是自から一種類をなすものあり、總べて是等の區分によりて、更には是を細別せば、尙嚴格の種目を立てざるべからず、されど、そは反つて初學の士をして其選擇に苦しましむるものあるべきにより、今は假りに如上

の區別に従ふ事とせん。
然れども大體に於て、文の種類と散文と韻文の二つに分つは、大過なきものゝ如し、凡そ一國の文學は、すべて此二様に分るゝものにて、散文は専ら思

想、感情を文字の上に表明して、人に讀しむるものあれば、敢へて調律、音韻に妨げらるゝ事なく、從横に其思想、感情を表明するを以て可とす。されど韻文は然らず、もと言語の音律によりて、謠ふものあれば、吟唱に便ならしむべく、調律を正し、音韻を正確ならしむるを要す。文の種類に就きては、其區別の一々に就いて説明するの要あるにより、後段其各項に就いて、各自是を詳述すべきにより、茲には重複を避けて是を記さず、たゞ初學の士の此區別を、先づ頭腦におきて、更らに後段説く所の各文に就いて其種類の差を見、以て作例と對照するの便に供せらるべし。



第二編 散文

散文は前章に於て述べたる如く、日本文章の二大別にして韻文と並び、總べての文章の種類を包擁するものあり。

散文は或る意味に於て文の形式に對して附したる名稱にて、其形概ね長形あり、拗くとも韻文の形より、より長きものあり、韻文が多く唱吟の爲めにあざるゝ思想感情あらば、是は多く讀誦する爲の思想感情の表白あり。

我邦に文學あるものありてより以來、散文と韻文の別は截然其内容に於て區分せられ、上古の歌謡は韻文の素をなし、同代に我邦は神國なるにより、神を祀る爲にさされたりし祝詞が散文の源とありて、漸次發達し、奈良朝時

散文とは如何
散文の歴史
歌謡祝詞

宣命
古事記
日本紀
風土記

日記、物
語

軍記物語

平安朝の
散文と鎌
倉時代の
散文の比
較

各時代の
文章の比
較

代に至りては、宣命の如きを出し、踵いて古事記、日本紀、風土記などの長文をも編成するに至りしが、未だ國字の創始せられざりし時代あるを以て、漢字の音訓を當て、是を記したり、されど此時代の後期に至りては、假名の創製せらるゝありて、思想の表白、思のまゝとありたるをもて平安朝に至りては、著るしく發達して、才華一時に爛發し、各種の日記、物語、紀行文を著し、夥しく出できて、散文は茲に確固の地盤を固めて、漸く一定の形式を著すに至りぬ、夫より鎌倉時代に入りては、更らに諸種の軍記物語を以てて、這度は純和文に漢文を交へ、一層自在の散文となりて、散文の形式輒々複雑となりぬ、されど複雑となりしだけ、それだけ思想の表明に便利なる幾多の便法が生み出されたるあり、試みに其變遷の状を見んため、各時代に於ける代表的文章を比較し見んに、上古の祝詞、奈の古事記の類は初學の士に

平安朝散
文の一例

おとろお
おとろお
おとろお
おとろお
おとろお
おとろお
おとろお
おとろお
おとろお
おとろお

は、其體の著るしき異點あるにより、理會し難からんと思惟するにより除きて、平安朝時代と鎌倉時代とを比較すれば。

平安朝時代の散文

●夕立

紫式部

五月雨は、いとよまがめくらし給ふより、外の事なく、騒々しきに、十よ日の月、華やかにさし出たる、雲間の珍らしきに、大將の君御前に待ち給ふに、花橋の月影に、いときはやかに、見ゆるかはりも、おひかせまつかしければ、千世をさしける聲もなんとまたるゝほどに俄に立出る村雲の景色、いとあやにくにて、おどろくしら降る雨にそひて、ざと吹く風に、とうろも、吹きまどはして、空くらと心地す

るに、窓を打つ聲を、珍らしからぬふるごとくをうちずし給へるも
をりからにや、いも垣根に、ことおはせまはしき御聲あり。(源氏物語)

鎌倉時代の散文

●宇治川の先陣

作者不詳(一説に葉室時長)

平等院の小島が崎より、武者二騎蒐け出でたり、梶原源太と佐々木四
郎とあり、景季が装束には、木蘭地の直垂に、黒革絨の鎧に「三枚冑
の緒を占め、滋藤の弓の中を取り、二十四差したる小中黒の矢負ひ、
練鐔の太刀佩きて、鎌倉殿より給りたる、磨墨といふ名馬に、黒塗の
鞍置きて騎りたる。高綱は、褌の直垂に小櫻を黄に返したる鎧に、鎧
形打ちたる冑に、笛藤の弓の真中取り、二十四差したる石打の征矢、

いも(珠)
いもうと
にあらず
契りし女
なり

鎌倉時代
散文の一
例

平等院は
山城國宇
治川の畔
にあり

鎌倉殿は
源頼朝が
事

安んず
思ひて
先陣の
名高し
に高綱
に安んず
思ひて
先陣の
名高し

頭高に負ひ、噴物造りの太刀帯びて、是も鎌倉殿より給りたる生倭に
黄殺輪の鞍置きてを騎りたりける、誰か先陣と見る所に、源太颯と打
入て、遙に先立ちけり、高綱云ひけるは、如何に源太殿、御邊と高綱
と外に入さければ、斯く申す、殿の馬の腹帯は、以ての外に緩つて見
ゆるものか、此川は大事の渡あり、河中に鞍踏返して、敵に笑はれ
給ふまよと云ひければ、さもあらんと思ひて、馬を留め、鎧踏張り立上
り、弓の弦を口に咬へ、腹帯を解きて、引締々々ける間に、高綱颯と
打渡して、二段ばかり先き立ちたり、源太、歎嗚られけりと思はらず
思ひて、是も打浸して渡しけるが、馬の足綱に懸つて、思様ふにも渡
らず、高綱は、究竟の逸物に乗りたれば、宇治川早しといへども、淵
瀬をいはす、さよめかして、金に渡し、向ひの岸近くありて、高綱が

馬綱に懸り、尾をさと歩み除けければ、元より期する事あれば、太刀を抜き、大綱小綱、三筋ばかり颯と切り流し、向ひの岸へ打上り、鎧踏張り、弓杖つきて、佐々木四郎高綱、宇治川の先陣渡りたりや、と名乗も果さぬに、梶原源太も、流渡りに上りにけり。(源平盛衰記)

斯の如く平安朝を代表する源氏物語と鎌倉時代を代表する源平盛衰記との、各一節を採つて、是を比較し見るに、其間非常に徑庭を見るべく、單に純雅文と和漢混淆文との差のみにあらず、暢達の點に於ても、格段の變遷を見るを得べし。

散文は斯の如くにして、既に平安朝と鎌倉時代との間に其差をあらわしたるが、更らに鎌倉時代の後を承けて、足利時代には應仁以來の兵火によりて、文學甚だ振はず、爲めに大なる變遷あかりしとはいへ、此時代に韻文的散文とし

平安時代
鎌倉時代
の比較
足利時代
の散文

諸曲、御
伽草子
徳川時代
政教主義
の影響

元禄時代
井原西鶴
近松門左
衛門
文化文政
時代
龍澤馬琴
室鳩巢
新井白石
村田春海
伴信友

て、諸曲を生み、小説の濫觴として御伽草子を生みたるを、亦新しき散文脈を産出したるものといふべし。

徳川家康、志を天下に得て、覇府を江戸に開くや、政教主義を以て、天下を統一せんとし、盛んに文學を奨励したる爲め、此時代に入りてよりては、敢て散文といはず、韻文、美文、俗文等、あらゆる文章は、文學の普及に伴れて創始せられ、諸種の體をあすに至りぬ。特に元禄時代前後に於ける井原西鶴、近松巢林などは、當時の大文章家及詩人として、一種の文脈をあし、文化文政時代にては龍澤馬琴、爲永春水の如き俗文家の泰斗輩出し、一方散文の上乗るものとしては、室鳩巢の駿臺雜話、新井白石の折焚芝の記の如きもの出で、村田春海、伴信友、橋南齋などいふ學者によりて各一家の文をあすありて、擬古文の傍ら新文體の翕然として出るあり、著るしき發達を遂げて

散文を作る心得

時代の變化によりて文章も變化す

徒らに疑古に流るべからず

初學の志すべき方針

終に明治時代の散文を形造るに至りたるあり。其變遷と文の様式を示して、參考に資するは重複の嫌あるにより、讀者は各項示す所の作例に就て、よろしく是を檢覈玩味せられよ。

要するに散文の歴史は斯の如し、其時代々に依りて、時代の反響と要求とにより、思想感情を表明すべき文の形にも、種々の差を生ずるものなれば、たとへ、其美文たると論文たるとを問はず、現代にありては現代に適應すべき文を作るをよろしとす。唯々徒らに平安朝の華麗を慕ひ、鎌倉時代の暢達を喜んで、古人の糟粕を嘗むるのみが作文の秘訣にはあらず、要は是等の名文を咀嚼して、其文範とあすに足るべき佳句美辭を味ひ、是を別出して自家の藥籠に收め、以て自己一己の文を作るにあるあり。同じく散文と雖ども、是を細別せば、文の形式、内容の差によりて、更らに

幾多の分類を見るべきは、既に上記の如し、這は以下其各項に就いて説明すべければ作例に就いて見るに先ち、其作るべき心得を咀嚼せよ。

第一章 美文

美文は即ち散文の一種にして、美ある文章の意あり、されど美ありといふ事は、單に文の形をいひたるものにはあらず、一種の文體稱あり、是を約言すれば、文の實質の名稱にて、實用や敘事を表す意より、讀む人の感情と思想へ惣たへて、其美感を惹き起さしむべく、歎美せしむるものあらざるべからず。

元來文は其總てを通じて、簡潔にして達意を尊むものなれば、美文のみは此秘訣を應用しがたき場合あり、如何とされば、論文の如きは、其文を作るの

美文とは何ぞや
美文は文體の稱をいふ
美文の趣意目的

論文の目的と正反対なるが美文なり

美文を讀まざる趣意は娛樂的なり
美文の種

意、字句の上よりも寧ろ論旨の透徹を期するものなれば、是を讀むものを
して、其論じたる主意の那邊にあるかを知らしむるが最も肝要あり、即ち人
の理性といふ判断力に懇へて、其論旨に合點せしむるものを上乘とするが故
に、字句の洗練よりも、論旨の透徹を期する事の方が、其第一義あるあり、
字句を美はしくするといふ事も必要には相違なければ、それは第二義あり、さ
れば日用文の如きも、其通せんとする意志を簡潔に表す事が肝要にて、閑文
字は、成るべく是を記せざるを可とするものなれども、美文は即ち然らず、
其文を作るの趣意、既に讀者の感情に美感を與へんとするにあるを以て、其
趣旨全然娛樂的のものあり、されば美文を作らんとするはどのものは、先づ
此用意を腹中に納めて、然る後紙に對はざるべからず
されば、美文といふ事は、體の名稱あると共に、亦文の性質をいひたるもの

美文の範

實用的文章と美文の差異

美文を作る第一義

あり、此故に實用をなす文章を除き、總べて讀者の感興に懇ふる文は、概ね
美文といふを得べし、例へば旅行の趣味又は山河の美容を記述する所の紀行
文の如きも、體に美文の一體にして、抒情文、小説などは其趣意固より人の
感情に懇たへて、其弱點に投ずるものなれば、純美文なれども、事件を敘し事
相を記す敘事文、記事文の如きも、其記述の法によりては美文とあるもの多
くあり、傳記文の如きも然り、されど、科學的文章、例へば理化學、醫術
政治、法律等の原理を記する文章は、固より趣味を開發するものにあらねば
全然實用的にて其理を知らしむれば足るものなれば、美文とはいふべからず
此區別は美文を學ばんとするもの、先づ心得置くべき先決要件也。
然して美文を作るに、最も肝要なるは字句の洗練にあれど、それは單に文の形
式上の事にて、尙是よりも肝要缺くべからざる一事あり、それは他を今美文

美文は事件を離化するを要す

美文と他の比較 落花の雪 錦の葉 此の二句

を作らんとするものが、題とすべき事象、若くは事件を捉へて、茲に文章をかざんとするに當り、敘事乃至記事の如き文章ならば、其現はれたる事象若くは事件を其儘に、事象を事象とし、事件を事件として記すに止め、其趣意を達するが肝要なれど、美文は然らず、其事象あり事件あり又は感想ありを醇化して美あらしむる事が必要にて、結局事柄を華麗の筆致によりて美化せしむるあり、美化とは普通の事柄を單に形式的に記するに止めず、夫れ以上作るものゝ美ある思想によりて、醜ある事も美とあすをいふ、例へば茲に太平記の一節に就いて見んか、其美化てふ意義自ら釋然たらん。

落花の雪

●俊基朝臣の東下り

作者不詳(一説に小島法師)

落花の雪に踏み迷ふ、交野の春の櫻狩、紅葉の錦着て返へる、嵐の山

は對句な序に、落花の雪、錦の葉、此の二句、美文と他の比較、落花の雪、錦の葉、此の二句、美文と他の比較

の秋の暮、一夜を明すはとだにも、旅寢とあれば物憂さに、恩愛の契り淺からぬ、我故郷の妻子をば、行衛も知らず思ひかき、年久しくも住み馴れし、九重の帝都をば、今を限りとかへりみて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中を哀れある、憂さをば止めぬ逢阪の、關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱、沖を遙に見渡せば、潮さらぬ海に魚れ行く、身を浮舟の浮き沈み、駒もどると踏み鳴らす、瀬田の長橋打渡り、行きかふ人に近江路や、世をうねの野に啼く田鶴も、子を思ふかと哀れあり、時雨もいたくもる山の、木の下露に袖濡れて、風に露散る篠原や、笹わくる道を過ぎ行けば、鏡山はありとて、涙に曇りて見え分かず、物を思へば世の間にも、おいその森の下草に、駒を止めてかへりみる、故郷を雲や隔つらん、番場、醒が井、柏原、不破の關

ば潮な依
貴水也
つて潮な
らぬ海と
云たス也
鏡山は多
り山は鏡
の山とい
ひたりは
より涙に
くはりて
見はれり
ずとに鏡
を照れ鏡
此照れ鏡
意照れ鏡
身のつか
と捕はら
かれつら
刑せら

屋は荒れ果て、猶洩るものは秋の月の、いつか我身の尾張ふる、熱
田の八劍伏拜み、潮干に今は鳴見瀉、傾く月に道見へて、明けぬ暮れ
ぬと行く道の、末は何處と遠江、濱名の橋の夕潮に、ひく人もあき捨
小舟、沈み果てぬる身にしあれば、誰かあはれと夕暮の、入相あれば
今はとて、池田の宿に着き給ふ、元暦元年の頃かどよ、重衡の中將の
東夷の爲に捕はれて、此宿に着き給ひしに。
東路に壻生の小屋のいふせきに、故郷如何に戀しかるらん。
と長者の娘が詠みたりし、其昔のあはれまでも、思ひ残さぬ涙あり、旅
館の燈幽にして、鶏鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍川を打渡
り、さやの中山越え行けば、白雲道を埋み来て、そことも知らぬ夕暮
に、家郷の天を望みても、昔西行法師が、命ありけりと詠じつゝ、二

るの尾
終の尾
たけを
是るに
高きを
此詞を
てけつ
逢へば
の清い
いふ水
はきま
は山も
打はら
と山に
如けり
ふ人近
江ふ路
かけや
此類多
參酌せ
東夷の
源氏の

たび越えし後までも、羨しくを思はれける、際行く駒の足早み、日す
でに亭午に至れば、乾飯を進るほどとて、興を庭前にかき止む、中柄
を叩きて、警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すを
りと答へければ永久の合戦の時、院宣書きたりし咎によりて、光親卿
關東へ召し下されしが、此宿にて誅せられし時。
昔、南陽縣、菊水、 汲下流而延齡
今、東海道、菊川、 宿西岸而終命
と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我身の上になり、哀やいとま
さりけん、一首の歌を詠じて、柱にぞ書れける。
古もかゝるためしを菊川の、同じ流に身をや沈めむ。
大井川を過ぎ給へば、都にありし名をきゝて、龜山殿の行幸の、嵐の

白雲道を
埋むと申
山を越ゆ
るに山に
て其高き
をいはれ
が爲なり
西行法師
の命なり
道は西行
が諸國を
巡歴して
山に來り
命なりや
けりや
との中山
最早再び
此山を越
ゆ事ば

山の花盛り、龍頭鶴首の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今は二たび見ぬ夢とありぬと、思ひつゞけ給ふ、島田、藤枝にかゝりて、岡部の眞葛うら枯れて、物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、蔦楓いと茂りて道もあし、昔業平中將のすみ所を求むとて、東の方へ下りしに、夢にも人に逢はぬありけり、とよみたりしも、かくやと思ひ知られたり、清見海を過ぎ給へば、都に返へる夢をさへ、通さぬ波の關守に、いと涙を催され、向は何處三保が崎、興津、蒲原打過ぎて、富士の高根を見給へば、雲の中よりたつ煙、上さき思に較べつゝ、明る霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、潮干や淺き船見えて、折たつ田子のみづからも、うき世を廻る車返へし、竹の下道行き惱む、尾柄山の峠より、大磯小磯見おろして、袖にも波は小ゆるぎの、急ぐ

が此命で
あつても
ひらきも
係らずに
あつても
あるを云
たるに云
俊基卿は
罪人として
らるる故
再び越ゆ
る期なゆ
たる流儀
承久の亂
は北條義
時後鳥羽
上皇の軍
亂をいふ
龜山殿の
御幸は龜
山天皇の

としもはあけれども、日數積れば七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着き給ひけれ。(太平記)
此一例は美文の意義を説くと共に、美化てふ事の如何ある方法のものたるやを知るを得べし、南北朝の時代、王事に盡して鎌倉を倒さんと謀りし事北條氏の知る所とあり、俊基朝臣は盟主の故を以て、捕はれて京都より鎌倉へ送らるゝ、囚人としての組行を描きたるものにして、一編の骨子は、俊基卿流竄の道行に過ぎず、然も太平記ある書は、もと一種の小説的讀み物として、將た平家の如く樂器に合して奏でんとしたる唄ひ物的なれば、全然趣味の充溢を期したるもの、即ち美文あるあり、此故に此一編は俊基卿流竄の道行を骨子としるにも係らず、東海道中有名の驛路を文中に美しく含して、即ち全體を趣味あるべく美化したるあり、是を作者にありて、此の如き作り方を客

幸をいふ
伊勢物語
なる宇都
の山邊の
現にも人
達はわな
りけり
とあり

美文の特
質
美文の美
文たる所
以
客觀文の
實例
敘事文と
の比較

美文を作
る心得
文を美化
する方法

文章と同
情

美文の適
する文體

観とはいふあり、總べて美文とは斯の如きものにて、最も趣味ある印象を以て文を飾らざるべからず、されど若し是を他の實用的文章若しくは普通の敘事文としたらんに、單に。

俊基捕へられて鎌倉に送らる、幾多の驛路を無事に遠江國池田宿に着す、元暦の頭重衡中將、源兵の爲に擒とあり、關東護送の途中、此地に宿し、長者の娘が詠みたりといふ古歌を思合して哀れ深し、翌日さやの中山を越ゆるに當り、是處にても西行が命ありけりと詠じつゝ、二たび越し事を思出されて、悲哀更に切ありき、東海道菊川に至りて、承久の亂に座して、爰に斬られたる時、一首の詩を遺したる光親卿の事も、我身の上と思合はされ、即ち「古もかゝるためしを菊川の、同じ流に身をや沈めむ」と詠じて終に鎌倉に着しぬ。

是にて意は充分あるあり、されば普通の文ありせば、簡潔にして達意を要するが故に、敢へて其間に修飾の辭句を交ふるの必要をいへども、美文は然らず、可成だけ面白く趣味深からしむるものあれば、大體の敘事の間にて、艶麗なる字句を點綴し、以て文を美化するにあり、是れ蓋し美文と他の文との異なる所あらん、然して哀ある境遇哀ある事象、若しくは慘憺たる、愉快ある等の事象ありせば、及ぶだけ其同情を惹くべく、哀れあるべく、慘憺あるべく、愉快あるべく記する事こそ肝要なれ、此文にても俊基卿の哀ある境遇に同情して、全編すべて哀的文字を以て作成したればこそ、涙催すやうにもかばえらるゝなれ、美文を作くらんとするものゝ、先づ斯くの如き心もて、紙に臨むにあらざれば、其眞諦を得難し。

殊に現今行はるゝ文體の中にて、漢文調は豪宕にして簡潔あるが故に、其文

和文調

近代の美文

美文作例

體の特質として美文よりは論文、傳記文などに適すも、和文調は其文の特質として、流麗優美なるにより、尤も美文に適す、尙近代の美文は多く和文を基礎として、まゝ漢文の佳句をも折衷しあるにより、美文を學ぶもの、其文體の選擇に就いても、豫め此特殊の點あるを察知し、かねて其適應せるものを採るの注意を怠すべし。

美文あるものは概略まづ斯の如きものければ、以下其文範として諸種の文例を示すべきにより、熟玩讀味して再三是を咀嚼し、以て自家の藥籠中に投じ文に應じて爛發するの用意を怠らざるべからず。

●美文作例

●春の景色

梁 式 部

うらやけ
きはら
きく
の意

のびやか
は伸びか
悠長とな
るな

まねびは
眞似する
即ち學ぶ
の師原な

かうやう
には工み
得難しは

年たちかへる朝の空の景色、名残なく曇らぬうららかなけさは、數多らぬ垣根の内だに、雪間の草若やかに色づき初め、いつしかと景色たつ霞に、木の芽も打けぶり、自ら人の心ものびやかにぞ見ゆるかし。

ましていと玉を敷ける御前は、庭より始め、見所多く、みがき増し給へる方々の有様は、まねびたてんも言の葉たるまじくあん。

春の御殿のお前と分て、梅の香も御簾の内に匂ふに、ふとまがひて、生ける佛の御國と覺ふ、さすがに打解けてやすらかに、住まし給をへり。(源氏物語)

●夏の景色

作者不詳

五月雨の時間さき空も、いつしか名残なくありて、雲の降立かさる

如何に名匠の工も此やうに奇麗な景色はたかく事はいふ事別きて佛の御足膝の下につかまうつり云やい僧侶をい菅原の右大臣源氏光君の四つは光君の事

り、いみじき書を書く手にも、かうやうには工み得難し、梢の蟬聲の果敢あし喧しう、枕がみうるさけれど、げには里のかたへの、こほはとある唐の音とは様かはりたり、垣根に咲ける夏草の花よりも、猶小やかある池といへど、濁にしまぬ蓮の花着ける計り、心もさよさ事ばあらじかし、同じ花紅葉も人により心によりで、敷そへられ物すれど、別きて佛の御足の膝の下につかまうつりあるは、生さとし生ける人草も、皆此の宿り願はぬものやはあらぬ、昔ありける菅原の大臣も「清蓮花入夢、拜佛坐金籠」と作り玉ひしぞかし、夕ばえ尙は有り難う、端居涼しう思ひとりて、やゝ短夜といへど、夜の更くるまで程久しきに、水鶏のけしからず敵くに、たが門さしてと、他所の戸ざし思ひやり、深う枕とて草引き結びうちぬるに、早や夜も明けぬ、閑伽

神とは雷の事とははたぬきくは鳴り響く事光君の四つは光君の事

奉り花たうべんと、眼すりく打向へば、昨日の空には気色かはりて雲打覆ひ、大かたはふじの色めきたり、心さき空と、かゝる色はいみじうおぼゆるに、神ことぐしう鳴り、おどろくしう鳴りはためきて光君の西の海にさすらひしも、このためしおぼえて、昔物語りをつかしう思ふに、釋まぐ神(雷)二つ三つ落ちぬべし、かくして雨の競ひふる事、唯修羅道の矢叫びもかやうにやは、かゝる山里は一としは雨の音も、鳴神の音も、木魂に響きて凄じかりけり。(四季物語)

●秋夜笛を聞く

兼好法師

怪しの竹の編み戸のうちより、いと若き男の月影に色むひさだかあらぬど、艶やかある狩衣に、濃なるしぬき、いと故つきたる態にて、小

京都の神官茂
なり時ふて
を野に隠
山方丈の隠
座室に作
り是以て世
の無常と流
轉さるるを
遠ざかり
たる人編
の如きも
皆世の無
常を寫し
たるもの
のたらし
のたらし
作例の解

ひる、此主と住家と、無常を争ひさるさま、いは、朝顔の露に異ならず、或は露かちて花残り、残るといへども朝日に枯れぬ、或は花は萎みて露尚消えず、消えずといへども、夕を待つ事なし。

如上挙げたる四の作例は、今より千年乃至六七百年以前の雅文にして、前者は作者の感想に浮びたる客觀の事象即ち春の景色あり夏の景色ありを文の對象として、其景色の態を筆に寫したるものあり、されど自然を自然として描寫したるにあらざる、幾分か作者の感想を交へて、彼景の間に美感を惹き起さしむるやうあしたるもにて、後の兼好法師の秋夜笛を聞くは、偶然逢遇したる事象を捉へて、是に秋夜の景致を添へ以て文を美化し、讀むものをして趣味を感せしめんとしたるものあり、鴨長明の流轉無常は、全然自己の主觀に浮びし感想を表現したるものにて、皆共に事實を記する以外に、文を美化

太政入道
は平清盛
戒めおく
る戒散す
心ゆかず
は心配に
なる事

したる所あるあり、是等の文體は概して敘景若くは敘事の美文なれど其記する所、多く作者の感情、若くは思想にして、主觀的なる所多し。

●重盛諫言

作者不詳

太政の入道は、かやうに人々夥多戒しめ置きても、猶心ゆかずや思はれけむ、赤地の錦の直垂に、黒系絨しの腹巻の、白金物打つたる胸板せめ銀の蛭巻したる小長刀を脇にはさみ、中門の廊にぞ出でられたる貞能を召す、筑後の守貞能は、木蘭地の直垂に、緋絨の鎧きて、御前に畏まりてぞ候ひける、入道のたまひけるは、いかに貞能、此事は如何思ふぞ、入道君の御爲に、既に命を失はむとすること度々に及ぶ、されば人何と申すとも、いかでか此一門をば七代までは、思召しすてさ

更におぼえ
ずおぼえ
ひていふ
やあるま
はあるま
トあるま
意味なる
がそを反
對に思ひ
現に此有
様にては
現にては
なりとい
ふわけ
蓮府槐門
の位に高
位首官

ふこと、たやすき事には候まじ、就中御出家の御身あり、法衣を脱ぎ捨て、忽ちに弓箭を帯しましません事、内には破戒無愆の罪を招き外には仁義の法にも叛き候ひあひす、御心を鎮めて重盛が最後の言を聞しめし候へかし。』まづ世に四恩といふ事の候が、其中に尤も重きは朝恩あり、普天の下王土にあらすといふ事あり、とこそ承れ、いはんや御身に至りて、先祖にも未だ聞かざりし、太政大臣を極めさせ給ひ重盛が不材愚聞の身を以て、蓮府槐門の位に至る、然のみならず、國郡半ば一門の所領たり、是等莫大の朝恩を忘れさせ給ひ、みだりがはしく、法皇を傾け參らせ給はん事、神慮にも背かせ給ひ候ひあんず。』そも當家の運命、未だ盡さざるによつて、御謀反現はれ、仰せあはせらるゝ、成親卿を召し置かれぬる上は、君の爲には愈々奉公の忠勤を

院の御所
守の御所
参らせん
と右近衛
の右近衛
大臣にて
武人兼
ね一人兼
ある禁
裡を守り
の任なり
故にいふ

賜し、民の爲には増々撫育の愛憐を致させ給は、神明佛陀も感應ましく、君にも思召直させ給ふ事、まどか候はざるべき、斯く申すも聞召され候はずば、今より重盛は、院の御所を守護しまわらせ候はん。』
悲哉、君の御爲に忠を致さんとすれば、父の高恩忽に忘れんとす、痛ましき哉、不孝の罪を遁れんとすれば、君の御爲には、既に不忠の逆臣とも成りぬべし、申しうる所詮は、唯重盛が首を召され候へ、何時までか命生きて、亂れむ世をば見候ふべき、末代に生を享けて、かゝる目に逢ひ候ふ重盛が、果報のはとこそ拙ふ候へ、今も侍一人に仰せつけられ、御つばのうちに引出されて、首を刎ねられ候へとて、潜然と泣き給へば、其座に並み居給へる一門の人々、皆袖をぞ濡されける。(平家物語)

物の具水
走らしど
は鑑に満
る水を走
らしたる
壯快の状
をいふ

主上は
後醍醐天
皇をいふ
萬里小路
藤原藤房
同季房兄
弟

岸に打ちあがりて、鑑踏ん張り弓杖つき、物の具の水走らし、鑑づき
す、鑑は緋絨しに金物うち、未だ未の時とぞ見えし、白星の宵猪頸に
着あし、大中黒の二十四さしたる矢、頭高に負ひ、重藤の真中取り、
紅の幌かけて、進錢茸毛の馬の太く逞しきに、金覆輪の鞍かいてぞ
乗りたりける。(源平盛衰記)

● 笠置落

作者不詳

卿相雲客、皆歩跳ふる體にて、何處をも指すともなく、足に任せて落
ち行き給ふ、此人々、始めのはどこそ、主上を扶け進らせて、前後に
御伴とも申されたりけれ、雨風烈しく、道闊くして、敵の鬨の聲、此
處彼處に聞えければ、次第に別々にありて、後には唯藤房、季房二人

赤坂城は
河内にあ
り

逃げぬべ
き心地と
は身疲れ
れてとて
も逃るゝ
こと能
はざるを
いふ

の外、主上の御手を引進らする人もあし、夜の内には赤坂城へと、御心
を盡されけれども、假りにも未だ習はせ給はぬ、御歩行すれば、夢路
を迂る御心地して、一足には休み、二足には立止り、晝は道の傍ある
青塚の陰に、御身を隠させ給ひて、寒草の疎あるを、御座の菌とし、
夜は人も通はぬ、野原の露、分迷はせ給ひて、羅敷の御袖を乾しあへ
ず、どかくして、夜るひる三日に、山城の多賀郡ある有王山の麓まで
落させ給ひてけり、藤房、季房も、三日まで口中の食を断ちければ、
足たゆみ、身疲れて、今は如何なる目に逢ふとも、逃げぬべき心地せ
ざりければ、詮方なく、幽谷の岩を枕にて、君臣兄弟諸共に、現の
夢に伏し給ふ、梢を拂ふ松風を、雨の降るかど聞食して、陰に立よら
せ給ひたれば、下露のはらくと、御袖にかゝりけるを御覽せられて

笠置山は山城國の南端大和國に隣る相樂郡笠置村にあり
皇居隠れなくすは山の上の御座あらせ
らるるを捜し出さるる事なり
南都は大和國の舊都
和國の舊都
股湯は古の湯
那古の湯
君上は古の湯
王湯は古の湯

』として行く笠置の山を出でしより、天が下には隠れ家もあし。』藤房卿泪を抑へて『いかにせむ憑む陰とて立寄れば、猶袖濡らす松の下露』山城の國の住人、深須入道、松井藏人の二人は此邊の案内者ありければ、山々峯々、残る所なく捜しける間、皇居隠れなく尋ね出され給ふ俄の事とて綱代興だにさかりければ、張興の怪しげあるに扶け參らせ、まづ南都の内山に入れ奉る、その體たゞ股湯夏臺に囚れ、越王、會稽に降りし昔の夢に異ならず、是を聞き、是を見る人ごとし、袖を濡さずといふことさかりけり。(太平記)

此三例は全然敘事的の美文あり、平重盛が其父清盛を諫めたりといふ當時の事實、若しくは、足利又太郎忠綱が平等院の合戦に宇治川を先陣したる、あるは又後醍醐天皇が、笠置を没落して囚はれ給ふといふ事實を、事實のままに記したるものなれば體は敘事的なれど、其事實を記するに、事實以外に美文をさせる所、乃ち敘事的美文にして、然かも和漢混淆文なれば、前段に惹きたる雅文と對照して、其異なる所を認むるを得べし。

山家の梅

村田春海

大伴の宿禰の主、今は塵の世の汚れを逃れ、其遠祖ある筑紫の御子ともちの古を偲び出て、百千の梅を砌に根こし移し、そをもて清き心の友とさんざしける、茲にわが思ふ友垣、相伴ひつゝ、其花の盛りをも過ぎ、世の外を春をも見んとて、ふりはへて訪ふ事あり、頃は如月の十日餘りあるに、彼の見ゆる岡邊の雪は、猶消へ残りながら、打霞む森の梢どもは、春の光充ち渡りて、そこはかどなく開ゆる鶯の聲も

越王は支那の諸侯
那古の湯
君上は古の湯
王湯は古の湯

如月は二月

心ゆくは
心地よき
事なり
松の原
ひて其
の自然
のまよ
を舞踏
す

土蓋度々
廻るほどは
酒敷の重
なるを云

人來と厭ふにはあらで、吾を呼ぶる心地のすめるは、心ゆく夕なり
所は東の比叡の麓なれば、世離れて、かすかに住ひおしたり、松の扉
萱が軒、いとこととぎたるに、おのづからある竹叢を籬に結び渡して
偃き入る水の流れ清く、石のたどすまひ、殊更をらすしなして、庭の
面いと廣らるるに、植え添えたる千本の蔭は、色に香にとり並べて、
露を妬み、霞にさはへるけはひ、此世のものとしもおぼえずあんある
かくて人々感じてくつかへりつゝ、花のもとに咽喚すれば、主は酒肴
とりまかまひ、土蓋採り上げて「梅見にとどはれもするか大伴の、昔
おはゆる宿あらなくに」とよみ出でたるを、取あへず一人が「大伴の
名も香くはしき宿の梅の、昔の春を忘れやはする」土蓋度々廻るほど
に、月さやかにさしのぼりて、木蔭も隈なく見ゆるに、吹くとも知ら

されあひ
ては戯に
遊ぶ事

世のほだ
しなき人
は浮世の
塵に關係
東總せら
る事なき
人なれば
こを此樂
みを得る
なれ

ぬ下風に、匂ひ満ちたるは、酔を勸むるばかりあるがいはん方なし。
人々皆されあひて、あるはやり水に口嗽きて、香ての後はといひ、あ
るは昔の籬にかりて、雪を欺くと口吟び出るもあり、又物の音吹き
鳴らしたるは、花にうしろめたき調の名あるも、折にあひたる心々、
何れ可笑からぬはあらざりけり、いでや、かく遊びの道の樂しかるも
世の穢なき人こそはとて、主の誇り顔あるを、花の心も然か思ふらん
とぞ覺ゆる、されば、今宵の有様をしも、今日來ぬ友にも語らまし、
又後の思ひ出で草にもとて、月の光をともし火にて、かくがづくも
のに書ひつく。(琴後集)

是の一編は、國文中興の時代、即ち今より百二三十年はを以前に、平安朝時
代の古文を擬へたる雅文なれど、また多少の趣致の異なるを見るべし、是等

も亦隨筆的美文にして、敘事せるものあり、以上惹きたる諸作例は、多く近世以前、即ち中古時代以上の美文にして、近時直に移して適切なる作例とはあしがたし。されど、大凡そ文の推移したる態を見て、よく是を察すべし。

●十八樓の記

松尾芭蕉

美濃國長良川に望みて水樓あり、主を賀島氏といふ、稻葉山後に高く亂山左右に層りて、近からず遠からず、田中の寺は、杉の一叢に隠れて岸に沿ふ、民家は竹の圍みの縁も深し、瀑布屋々に引きはへて、右に渡船浮べり、里人の行交ひ繁く、漁村軒を列べて網を引き、釣を垂るゝ、おのがさまくぐも、たゞ此樓をもてあすに似たり、暮難き夏の日も忘るゝばかり、入り日の影も月にかはりて、波にむすばるゝ、篝火

俳文

「松尾芭蕉の俳句」
賀の故郷ありて、
世に北村又、
ひて京に、
りて北村又、
季に北村又、
江に北村又、
流に北村又、
終に北村又、
正に北村又、
風林を

起したる
文學史上
の偉大な

うべなう
べなう
なりは
なりは
なりは
なりは
なりは
なりは

の影も稍々近く、高欄のもとに鵜飼するをぞ、誠に目ざましき見ものあり、かの瀟湘の八つの眺め、南湖の十の境も、涼風一味のうちにおもひためたり、若し此樓に名をつけむとあらば、十八樓ともいはまはしきあり。『すぢをも忘れ、また人を羨むべき節をも思はで、己が心から、事足る業にしもあれば、かの古の人のいひけん理にこそかかはめいでや空蟬の世の、限りなき求ある際とは、日を並べて論らふべくもあらざりけり、うべなく、此住家をしも足る事を知るとは名けしこと。(風俗文選)

●五井の記

森 許 六

靈泉あり、水の湛ゆる事纔に尺あまりにして、三尺の盆池より流れ出

森許六は門下十人なり
下十人なり
哲一人なり
潛すとは
自分其資
格なきを
己がまじ
りにていふ
に潜上事
に潜上事
いふが如
くは是
處にては
識通した
る意味な
り
嘉山の泉
瓜州の泉
の金城は
共に支那
のありて
水の落き
を以て名

あり
堯は支那
古代の明
君は堯に
禹は堯に
繼ぎて天
下を治め
舜の後
續者なり
此所産室
の狭隘な
るをいふ

づる事滌々浴々たり、五老井と名く、別荘を開きて五老庵を結ぶ、主人姓は森、名は許六、自ら五老井先生と潜す、五老は予が別號あり、驛が原不知哉、川流れて鳥籠の山南に近し、十旬の休暇をうかひ、半日の閑を領する所あり、遙に聞く、東江芭蕉の翁、錫を阪西に趣かしめ給へるの折ふし、靈泉を共に汲んで、風騒の句を葎の中にどめむとならじ、其水の清き事は惠山の泉脈を通じ、甘き事は肅州の金泉に比し、立かへる春の朝、白散の薬をさげてより以後、四時の生涯を養ふ事數ふべからず、一と歳の間に通きて、泉を翫ぶ事は夏を主とす、霞山鳴が井盤の納涼、西上入の柳の陰も今此水に俤そひぬ、其徳、其要、廣大にして、神佛の尊さをすゝしめ、且つ堯の井を掘り、禹の水土を平げてより、四民猶かだやかあらしむ、後に山あり、小栗

の岡といふ、暗に望み雪に對して、眺望極まりあし、湖水の島々、江南江北の山のたゞすまい、日枝、伊吹の嵩、比良、三上の高根に眸をさく、西南の丘に千鳥が岡あり、聖徳太子の御歌より、犬上の名どころとありぬ、杖を曳ては籬を廻り、岡に登る、炭は蝨をたすけ、栗は若粥を炊ぐ、柳庵は僅に筵三枚を設けて、膝を窄め、賓主六人一座に全からず、茶椀五、枕五、筆墨の外に物あし、月に杜鵑をそへ、驛路の鈴に里の砧を合せて、秋をかあしむ、庭に簾をあてず、樹の木餌を入れず、窓前の草自らあり、たましく烟を穿ては猫の瓜種を得、五色の茄子を植へると雖も、山蟻の爲めにせり落さる、肝潜居士文書に僻する事二十餘年、子瞻瑞を師とし、揚子梅道人が骨髓を伺て、雪裡の芭蕉、炎天の梅、自然に風雅を兼むとす、世上余が筆痕を樂んで、

俳文

俳文の創始者

俳文の特質

茲に擧げたる二例は前一例と、殆んど同期に屬すべき時代に、韻文の俳句正風を興して、俳壇に重をなしたる松尾芭蕉の文にして、這は俳文といふ、新らしき一體あり、芭蕉の文も、許六の文も共に俳文として作例を示したるもにて、其文に活氣あり、簡選なるは美文を學ぶもの、尤ども多く宗とするに足るべく、今代の小説の地の文などは、多く其素を俳文に出したるものに

柳林下 渡臺

子が心頭の樂みを知らず、風雅に是非を争ひ、畫圖は郷童の前の戯と
かる、未だ風雅の爲に文書をしたのしむといふものを聞かず、予と共に
志を同ふして、早く吾をたすけよやく、終日樹下に徘徊すれども、
更に答ふるものなし、四隣の鳥聲、花間の峰蝶のみ笑て、青天に腹鼓
を鳴らし、五老の流に脚を洗ふて歸る、于時元録壬申春二月、於渡臺

俳文と近體文との關係

淨瑠璃文

女のこは

て、美文としては多くの價值あるものあり、されど、文學が専門の科として研究せられざる近世にあつては、俳文、戯曲、小説、等の如き、自ら上流の士に遠けらるゝの風ありしが、今や然らず、凡そ文と名けらるゝものあらば、雅文と漢文と、俗文と和文と、すべてに論ず、悉く咀嚼して、自家の藥籠中に藏するに至れるを以て、今代の文は、殆んど言はんを欲して盡さざる所なきに似たる所以あるあり、文を學ぶもの、忽にすべからず。

●國性爺合戦

近松門左衛門

一官兩手を擧げて、ア、是れく、證據はそつちにある筈、一とせ唐土を立のく時、成人の後遺念にせよと、我が形を繪に寫し、めのもとに預けおきたるが、老の姿は變るとも、而影殘る畫に合はせ、疑を晴れ

て方といふ事
「近松門左衛門」
左衛門といひ
子門といひ
長門といひ
肥前松津人
に古刺髪
いひ古刺髪
後ひ古刺髪
て京俗に
来り郡に

玉へ、のう其詞が證據と、肌に離さぬ姿繪を、高欄に押し開き、柄付
きの鏡取り出し、月にうつろふ父の顔、鏡の面にちかぐと、寫取つ
て引くらべ、引合せてよく見れば、繪に止めしは古の、顔も艶ある縁
の鬢、鏡は今の老妻れ、頭の雪と變れども、變らで残る面影の、眼元
口元その儘に、我影にさも似たり、て、方譲りの額の黒子、親子のま
るし疑ふし、扱は誠の父上か、さう懐しや戀しや、母は冥土の昔の下
日本とやらんに父ありとばかりにて、便りを聞かん術もさく、東の果
てと聞くからに、明くれば朝日を父ぞと拜み、暮れば世界の圖を披き
是は唐土、是は日本、父は是處にましますよと、繪圖では近いやうさ
れど、三千餘里のあまたとや、此世の對面思ひ絶え、もしや冥土で逢
ふ事もと、死すぬ先から來世を待ち、歎き暮らし泣明かし、廿年の夜

家の諸太
夫と事あり
りて年あり
を以て世
に立ちて
に陸本を
作る英の
アキスビ
日本並大
學者とい
和藤内一
が成内は
源氏鳥羽
子折

る畫は、吾身さへ辛かりし、よう生きて居て下さつて、父を拜む有難
やと、聲を惜まぬ嬉し泣き、一官は咽せ返り、樓門に籠付き、見あぐ
れば見かろして、心餘りて詞なく、盡さぬ涙を哀なる、武勇に逸る和
藤内、母諸共に伏沈めば、心なき兵も、こぼす涙に鐵炮の、火繩もし
めるばかりあり。

●源氏鳥帽子折

近松門左衛門

頃は正月の末つ方、春めながら冴へ返へり、袂の氷柱とき知らぬ、常
盤御前は常盤木の、木の下闇に踏み迷ふ、夜深き空や世にあらば、今
ぞ妹背の寝入りばな、今朝つれなくむく起きに、抱き厭して牛若の、
夢をば母の懷に、泣寝入りせし可愛さに、今若はかどさしく、吾妻か

乙若後に
僧義圖

初緒頃ふ
初下は専
以上は専
光景を鉞
のたる昔
正月に縁
ある事を
以て層々
文をつま
りつゝあ

らげに脚絆締め、乙若の手を引て、先に立ちたる歩みふり、小刀佩きたる腰付も、宛然父の御影かと、涙に涙果しなく、忍びつけたる顔くせや、いと傾く笠の雪、打拂ひつゝ見渡せば、賤が門田に齊摘む、東寺、四塚、鳥羽、繩手、諸國の秋を積みのせて、御貢の牛車、京の名残に轟かば、我心も打乗せて、送れ見送れ呼返せ、返らぬ水の泡沫に初歌謠ふ初蛙、梅に年とる鶯の、翼は雪に疊まれて、また片言の初音啼く、己がさまぐ春あれや、人の姿も若緑、竹田の里に来て見れば、藁屋が軒も飾繩、ほろが、樛鳥帽子にかけて、門松かげの小鼓や、ありけう有ける新玉の、年も若やぐ且より、水は和く柳は芽む、里も禁へまします萬歳鳥追、とりぐに、春は賑ふ折からの、厄神参り厄拂らひ、参る氏子は二つ三つ、また一つ身の縫上げに、蘇民將來子孫繁

此一編は
源義朝平
氏を倒さ
んとして
反て破れ
死したる
後其妾常
盤が三人
の孤兒を
擁して山
城の園伏
見の里に

昌、神堅かれど、石の華表の二柱、二人の親つ家土や、小弓に添へし八幡山、道すがらの参詣を、今若は御覽じて、是ぞ源氏の氏神に、我門出の吉相と、御手を合せ給ひければ、兄を見まぬに乙若も、牛若も母君の、乳房の上に手を合せ、さら／＼と愛らしさ、父義朝のましまさば、如何に喜び給ひあん、類なき若共を、母が袂の下にのみ、埋木とあすべきかと、昔を慕ひ行末を、思へば盡さぬ憂涙、我身一つの雨ぞかし、古へ人の浮名立つ、戀の百夜の深草山、あまゆる雪に雲暗く、まだ朝明けの心地して、三里に足らぬ玉鋒も、草鞋凍り足こゝへ、雪にも同じ墨染の、櫻の寺の晚鐘に、宿はあけれを里の名は、伏見に行くれ給ひけり、降る雪の音聞く程に静ある、竹よりをくの一つ庵、猫の通路跡付し、唯一筋の道細く、油火はのかにかき立て、女の業か

行幕れ憐
む有様な
序したる
ものにて
文章の妙
又と比な
し

しどけなき、引さなき紙を結びつぎ、半あけたる伊豫簾、嵐ぞ雪とも
てくる、常盤御前は灯火の、影を便りに尋寄り、大和へ下る女あるが
幼きものを召し具して、雪に道を失ふたり、一夜の情とありければ、
十八九ある女房の、紙燭をかへげて椽にいで、親子の人をつくぐと
打成り、悼しの有様や、御宿申したうは候へども、此頃平家の沙汰と
して、義朝の所縁をつよく詮議の候が、人々の有様咎めんは必定あり
みづからは白妙とて、藤九郎盛長が妹、源氏譜代のものなれども、不
思議の縁にて平家の侍、彌平兵衛宗清の忍び妻にあり候、今にも夫の
宗清殿来り給はよ、憂目こそ見給はん、情あしと思召ぞよ、妾がつ
らさは最愛し故、何處へありとも落ち給へと、いと懇の詞の色、
紙燭吹き消し入りにつけり。(中略)

前段に於
て宗清の
忍び家を
示し是れ
り宗清を
出して彼
等を捉へ
しむ

月も夜半に更け行けば、彌平兵衛宗清、女の庵に忍びしが、月にうつ
らふ人影は、何ものか怪しやと、傘かさしよく見れば、常盤親子に紛
れなし、網代の魚とざんされ、餘さじと身づくろひ、猶も事を伺ふに
ぞ、慈母の憐み孝子の振舞、源氏の振さしあり、悼しき憐さよ、今人
々を助けしとて、源氏の運の末なれば、終に捜し出さるべし、假令擲
め捕りたりとて、盡んず平家の御果報の、長久にもよもならじ。情知
らぬは匹夫のやう、殊に我妻の爲には主君あり、彼れ是れ助けて落さ
んと思ひしが、待て暫し、主君清盛の、御眼鏡を以て仰を蒙り、助け
ては道立たず、擲め捕ては情あしと、とつかいつ思案して、さあらぬ
體にて戸を叩けば、女房待ちかね柴の戸の、雪打ち拂ひ、草鞋もとく
く庵へ伴ひける。

近松の院
本の價值

此二章は、日本文學界の大産物たる、近松貞林子の時代浄瑠璃あり、前段にいへる如く、當時の作物にあつては、かゝる俗文を卑しとして、文を學ぶもの、僻見より、多く文の範とする事なかりしも、今代に至りては、盛んに文章家の歡び迎ふる所とあり、近松貞林子は諸種の文の泰斗と仰がれ、漸く研究するもの多きを加へぬ、もとより文は諸種ある故、外形甚だ卑しきやうなれど、調高く意深し、殊に事を敘する細緻にして、字々句々盡く金玉、美文としては蓋し是に上超すものなかるべし、然かも稍々今代の言文一致體に近くして、情を抒る具さに盡せり、試に此二例につきて、熟讀玩味せば、よく文に同化して、國性爺、常盤等の切なる悲哀にむせぶの狀、鬚髯として眼前に横らん、是れ等こそ眞に美文の純なるものにて、事實は誰も知る事なれ、其新に感ずる趣味は實に多大なるものあり、されど元來近松の作は、

近松の文
章の特色

近松の作
物は時代
物より世
話物によ
りとす

今代の美
文

時代物より世話物の方、文も美に、想も深きものなれど、世話物は男女間の戀など、材料として全編を編まれありて、然かも意極めて深重なる故、初學の士の前には提供しがたき事情あるにより、特に時代物より撰擇したり、然りと雖も、美文を學んとて、直ちに是を眞似んか、鵜の眞似する鳥にて、とても企て及びがたし。たゞ是等の文例は、圓熟したる後事象に應じてまねぶことをよけれ。

以上示したる諸作例は、すべて平安朝時代より、徳川時代に至る間の有名なる文章家が手にありしものを、かき集めて大方時代の文例を示すと共に、美文あるものゝ一斑をも伺ふ便宜にもと、是を列ねたるにて、何も現代に於て直ちに此體を學ばんこと、頗る困難なれば、まづ易きに就きて學ばんため、以下少しく、今代の美文に就いて其作例を掲ぐる事とすべし。

近世の美文

花咲く里
とは向嶋
なり作者
此處に住
せしを以
てしとい
ふ

●看櫻花

成島柳北

花咲かば、告げんといひし山里の、使は來たり馬に鞍おけ』と古人は
詠せしも、漁史(作者)は花咲く里に住馴るれば、使を待つにも及ばず、
馬を馳するにも及ばず、坐ながら花を見るを得べきに、朝は夙に門を
出で、夕は暮れて歸るが常なれば、花見る暇とてはあし、今年花候
も遅ければ、四月十五日の休暇こそ花盛りならめ、我が社(讀賣新聞)
の人々と共に、例の看櫻會を開かんと謀りしに、社員に差支ふる人多
くて、廿二日の休暇に延ばす事とはありぬ、さりとして、十五日の盛候
を空しく過さんは口惜しと思ひ、墨水の白鷗社中に同遊を謀りしに、
皆喜びて同意されぬ、其人々は、黙齋、東野、秋江、梅村、五松、翔

墨上の酒樓
邊の酒樓
をいふ

長命寺は
墨堤の半
服にあり
一傘双履
は傘一本
及下駄一
足だけど
いふ事

木母寺も
亦墨田堤
の半腹に
あり

翠、痴堂、薇山、聽秋、復軒、舩山の諸彦あり、墨上の酒樓も花時は
難香あり、若かじ各自一種の下物を携へて、清幽の地に小酌せんには
と、乃ち是を對岸の桃齋君に報じ、其別墅を借らん事を乞ふ、君之を
諾し、且酒と飯とは、主人是を辨せんとの答を得たり』十五日卯時よ
り、風雨大に作る、漁史一傘双履、雨を衝きて長命寺に到れば、東野
五松、梅村、薇山の五君あり、乃ち勇を鼓して長堤を歩す、此日は方
に咲きも残らず散りも初めぬ、十分の花候にして、遊客は雨の爲に跡
を絶ち、風景極めて清絶あり、唯北風雨を捲き、衣帽盡く濕ひ、木母
寺に到る頃は、粟膚し、手龜し、苦樂相半す、急に茅店に就き、一樽
を傾けんとすれば、村醪悪くして口すべからず、恰も好し、舩山翁腰
に一瓢を佩へり、衆狂喜して飲む、五松君平生悪客を以て鳴る、此日

首に盃を舉げて曰く、寒甚し、請ふ先づ隗より始めんと、以て風雨慘
凄の情況を知るに足れり』既にして、天時に午あらんとす、乃ち寺を
出で、右折して桃齋君の八州園に赴く、掬翠、默齋、復軒、聽秋の諸
君皆爰に會す、園中桃花盛放、近く堤上の櫻花と相映じ、風景畫くが
如し、衆皆痛飲高歌、歡を盡して散んず、此日秋江、痴堂二君、事あ
りて會せず、是を遺憾とすのみ。

●松島の記

作並 清亮

松島は、嚴島、天橋立と相並びて、三景と稱す、中にも天然の奇絶、
四時に隨ひ、朝夕に變りて、極ることなく、區域廣大にして、日を経
れども飽かざるは、誠に松島を無双とす、松島といふは總名にて、其

松島は陸

請ふ先づ隗より始めんと、以て風雨慘
凄の情況を知るに足れり』既にして、天時に午あらんとす、乃ち寺を
出で、右折して桃齋君の八州園に赴く、掬翠、默齋、復軒、聽秋の諸
君皆爰に會す、園中桃花盛放、近く堤上の櫻花と相映じ、風景畫くが
如し、衆皆痛飲高歌、歡を盡して散んず、此日秋江、痴堂二君、事あ
りて會せず、是を遺憾とすのみ。

前國にあり、大小の島々數多
地に數多の勝地あり、世に八百八島ありといふは、大小の島々數多
きをいふあるべし。『松島村に屬して、名ある島三十五あり、其餘他村
に屬して、松島の海面にある島々、碁局に石を並べたるが如く、何れ
も争ひて奇狀を呈す、中にも名高きは雄島あり、島々、何も天造の自
然に出で、前後の眺め種々の形をなし、棹を進め、花をめぐらすに従
ひて、千態萬狀、數へ盡し難ければ、里人と雖も、偏く其名を知らざる
ものあるとあり、されば見ゆる姿を以ていはゞ、八百八島といふも愚
かり。『東海は、何の處も日和よく、風靜まる時だに浪荒さを、松島は
數十の島支へたる故、海面平かにして鏡の如く、島々には松樹多し、
根を巖によせ、枝も幹も海風に撓られて、屈曲偃蹇したる狀、臥すが
如く倒るゝが如し、大小の島々、斷岸とあり、或は樹根を現はし、或

してゐる
状なり

好事の奇人
もの奇人
なごいふ
雅人の事
なり

明治初年
代の作例

最近時の
美文例

は奇石を出す、其状筆の及ぶべきにあらず、鳧鴈は人に馴れて驚かず
大魚は岸に近きて躍る、其風景の美しき事、晝夜旦夕をへだてず、殊
に見事あるは、雪の旦ありといふ、福浦島といふに竹多し、花挿筒に
作り、好事の人、茶杓に作る、又一種の竹あり、中の空あくして木の
如し、刀の目釘とし、其枝を以て箸を作る、松を名に負ふ島々の中に
節しげき竹の緑の繁ゆるは殊にめでたし。

此二例は美文としては、尙未しき所あれど、明治初年の文例として示したる
あり、明治近代の文は最々斯の如き體もて出で、續いで現今の如き諸種の體
を出すに至れるあり、最近時の美文として(小説以外)の二三作例を示さん。

● 二尊院

藤岡東圃

清涼寺は
京都嵯峨
愛宕山は
山城丹波
山境に多
國境に多
る高き山
翠巒の山
とほのみど
りの花ゆ
づりまを
粧したる
如き山の
二尊院は
京都嵯峨
利長寺古
はわたり
はわたり
花王日本
て知らる
わがより
と云かり

清涼寺を後ろに見て、愛宕山に向ふ所、翠巒の山を負ひて、鬱蒼たる
森の中に、檜皮屋の見ゆるは、我が二尊院あり、遊山見物最も多き花
の頃も、釋迦堂に喰止められて、此處までは人も來ず、清瀧街道の人
形硯も、今は廢れて、店頭春光空しく長閑なるに、一步を踏み入りし
舊刹の門前は、楓の若葉に交る山櫻の見る人稀に、幾百年誰が爲に咲
き散りにけん、境内塵も留めず、苔碧やかに、わが長に齊しき櫻樹の
花今盛りあるを、一筋の遣水細く是を廻りて、落ちかゝる二ひら三ひ
らを浮ぶ、寢殿造りの本堂にかゝる、小倉山の勅額もはのぐらく、詣
づる人もさければ、鉦の音も聞えず、寺域の往生院と續くところは、
一面の墓地あり、鷹司、二條、三條殿等の高貴の家も、吉田了意、伊
藤仁齋父子等の名譽の人も、名あくて過せし、田夫野人も、同じく土

伊藤仁齋 漢語に長じて、京師に在りて、中興の古學を講じ、一書たりて、學問の道を開き、學士に爲り、執事たり、人となす。

同窓諸兄 同窓は作者の同輩を指す。英文學科出身の海軍教員。

の床、土の枕に永眠しては、貴賤賢愚、畢竟何人の異なるぞ、宗祖大師の廟を廻りて、やゝ少しく後ろの山に登れば、眼界俄に開けて、時雨の亭愛にあり、京洛中、東山も、霞の中に指點すべく、嵯峨名所は一々眼の下に見えて、鶏犬の聲も、手に取る如くすれば、遊人が歡呼も開ゆるかと覺ゆれど、愛には松風の徐るに梢を渡るのみ。

我が同窓

淺野瀧虛

同窓諸兄！余が生來、初めて伊太利の山河に親めるは、實に公等と共に旅行せるに始まる。此一事のみにも、余は到底公等を追慕するの念を禁する能はず。嘗て船上より遙にチーブル灣の白み渡るを望み、思はず郷里の母を思ひ出で、夢かどばかりと叫びし時、——嘗てノ

授たる人 授たる人は、同窓諸兄を指す。同窓は作者の同輩を指す。英文學科出身の海軍教員。

ビシエートの峯頭より、初めてメシナの町と、アペソニースの連山と、スバルチメントの岬とを、一時に集めて、爰が伊太利の極端かと、惘然たりし時——嘗てクロース山の絶嶺より、獨逸軍に充されたる、平野の彼方、ニペロナの町の塔尖を見て、双腕の鳴りし時——嘗てフシナの堤上より、水天の接するあたり、縹渺として消えんとする、ベニス町の絶景に接して、是が此世の景色かと、双眼に涙を浮べし時——嘗てモンテロントの丘頭より、羅馬の町が、我軍の屯所と烟に包まれながら、突如として陣裡に入るに會して、かれ取れたるかど大聲を放ちし時より何れの時に於ても、少くとも諸兄の一人は、必らずわが側によりて、われと共に笑ひ、我れと共に泣き、我と共に詩興を催されぬ。』かるが故に、又哀しきにつけても、未だ嘗て諸兄の、當時の

南側にあ
る大都會
なり
羅馬の首
太利の首
府にして
大帝國の
ありし世
界第一の
美術府を

稼穡の家
とは農夫
の家

音容を聯想せずといふことを、今日の君は、そも何事をなし、何事を思ひつゝありや、果して同遊の當時を記憶せらるゝや否やと、思ひやらぬはあきどかし。『同窓諸兄！今後公等と會合の機會の起らん毎に吾は必らず、公等に同つて走り、且つ叫ばむ——願はくは吾等をして學校のこと、旅行のこと、戦争のこと、軍營のこと、又伊太利のことにつきて、共に語らしめよと。』

●文鳥日記

源田波蓮

われは稼穡の家に産れしを、不幸にしてこゝ三歳ばかり、都住の身となり、雲のたゞすまひ、水の流れ、木伐り男、草刈女、種蒔、蒔入あど、僅に夢にして親むに過ぎず、夏の白晝、鐵橋の欄干に身をもたせ

八軒屋は
大阪市の
東端に流
の川あり

神無月
十月の神
無月とい
ふ此月の
諸國の神
々皆出雲
大社に集
りて集會
をなす故
神の無き
月なりと
いふ傳説
による

八軒屋を出る川蒸氣船の行方を眺めては、街衢のたゞかみに破れて、舊廬の心やすきに歸り行く商人の後姿を吾かと疑ひ、大路をさしる荷車の列に行きあひては、聽ては町に下され、村に解かれて、あるは厨房に煙が手助とあり、あるは屯に童女の晴着とあらむを思ひやる、野雉は子飼せられて、漸く羽伸ぶるに至れば、岩上をさして飛びかへりぬ、これを名けて野心といふ、吾もさる類にや、神無月、時雨ふる此頃は、わけて山家のかもむさ慕はるゝ儘、心慰のはしものと、今日さる鳥屋につきて、文鳥一番を求め來りぬ。『この鳥古くは盛んに珍重せられしが、今は飼ふ人稀にされりとぞ、其故を知らず、吾は姿に音色に、田園の趣を忍ばしむるもの饒さを愛で、殊更に是を撰びしかり』購ひし籠狭ければ、新たに設けやるとて、古き箱を壊ち、匏をかく、

薄暮漸く成り、移りかはらしむ、籠歪みたれど、裏潤く止り木多ければ、鳥は喜ばしき風あり。權助といへる狗兒かへる、友のもとへ消息したゝめて、文鳥飼ひたり、見に来すや、君が家の犬は、家を守れど吾が家の鳥は盡す所をけれど、天童ふりと誇る。

まづ近體の美文は、かくの如きものあり、すべて趣味的に作成せらるゝ點に注意せよ、次に美文としての小説の二三例を擧げん。

● 教會堂

遅塚 麗水

「麗水遅塚金太郎」氏記者と新開記者と小説家なり又

吾が家は多摩川のはどり、百草の青蓮寺ある所の村あり、家には双親あり、父は鋤鋤を、母は杼機をもちて生計を営み居るあり、太郎は本郷ある己が下宿に還りて、稻村の洗濯婆、櫻田の孤兒をどにあひて、少

龍行文の作家として知らるる

言ひも知らずともは、何んやともは、いひやともは、のなやともは、いふは、意と

「紅葉尾崎」氏記者と新開記者と小説家なり又

からず胸中の鬱憂を散んじ、教會へ往かん其途中、龍岡町に柴野露子が家の門邊を過ぎしかど、訪ひもせず、教會に往き見れば、露子は其處にあらざりき、言ひも知らず物足らぬ心地したれど、白髭の牧師の説教、祈禱、皆と共に歌ふ讚美歌、いつしか頭も澄み渡る心地となりてさて教會の門を出でたりしは午後二時ありき。(小説金蘭薄)

● 文

尾崎 紅葉

隣りに養へる薔薇の香の烈しく薫んじて、颯と座に入る風の、此讀盡されし長さ文の上に落つると見れば、紙は冉冉と舞延びて貫一の身を繋り、猶をも跳らんとするを、彼は徐に敷据えて、其隣に俯げある面杖つきたり。『憎き女の文をんと見るも穢はしと、前には皆焚棄てたり』

中の一 流 たる 田 露 仲 氏 並 界 の 最 先 時 大 學 小 説 の 作 中 途 志 其 後 志 友 社 組 織 解 散 下 には 門 花 外 風 葉 天 外 柳 葉 等 あり

し貫一の、如何にして這回ばかりは終に打披きけん、彼は其手にせし始に、又は讀去りし後に、自ら其故を讓めて、自ら知らざるを愧づるありき。』彼は旋て屈めし身を起し、又直ちに重きに堪へざらんやうの頭を支へて、机に倚れり。』綠濃かに生茂れる庭の木々の輕々ある燥氣と、近き邊にありとある花の薫とを打雜せたる夏の初の大氣は、太だ慢く動きて、其間に旁午する玄鳥の聲朗に、幾度か返しては遂に往さける跡の垣穂の、然らぬだに燃ゆるばかりある満開の石榴に、四時過の西日の頼しく輝けるを、彼は煩はしとを自移して、更に梧桐の涼しき廣葉を眺めたり。』文の主は怨れと祈るばかりに、傘を捧げて神佛をも驚かし、と書けるにあらすや、貫一は又自ら何の故とも知らず、獨り之のみ披くべくもあらぬものを披き見たるにあらすや、彼を絡へ

旁午はあ ちこちす 梧桐は青 此一節は 紅葉の金 色夜叉の 一節なり 金夜叉の 晩年の傑 作に引年 明治十年 頃より引 續き今尚 完結に至 る美文一 致の美文 例の美文 作

る文は猶解けで、巖に浪の瀉ぐが如く懸れり。(金色夜叉)
這は小説中のあるものより、美文の文範として拔萃したるものにて、近體の美文中の稍通俗あるものは是れなり、次に近體の文として、一種の體をなす言文一致の美文例を載せ、以て本章を終らん。

●荒れたる野原

珠 璣 峰

いづれ荒野のその中ではあるが、別してシーエラブラマコノ山蔭、それを北に下りた一部の土地、その荒方といふものは、更に一層輪をかけた如くで、こんな凄愴い景色といふもの、恐らく世界にまたと見る事はできまいと思はれるほどである、是がまた目の及ぶ限りの原で、土性が例のアルカリー、見送る涯の天と地の境界線白く波狀に彩つた

野原の光景を美化せしめたるなり
「體峰氏」は昔時
「事新報」記者たり
「人なり」

「興野鐵幹」の維新主義に詩人なる新體の歌に八

が、雪のかさしの彼方の連山、その茫漠たる中で、生あるものゝ影といはんは扱置き、痕ひとつ見る事は無い、此處の、鋼色に澄み渡つた穹窿には、鳥さへ決してその翼を張らぬのである、俯しても仰いでも、何の動くものもなければ、ソソとの音さへ傳へるものはない、苟もこの原頭に立つ身は、何んとかく自分もその寂寞に釣り込れて、私に顧みて、我が生けるや否やを疑ふの感を起すのである。(モルモンの一節)

●馬關の港

興野鐵幹

冬の日の短いうへに、正午過ぎから曇りだして、今にも此乾風に氷雨でも降りさうな空は例より早う暮れた、この四五日石州さかひの山から避寒にかりてきたらしい、帯のやうな、灰色の濃い霧は、此處と門

なり多く此筆を以て
「維新」の地誌に
「興野鐵幹」の維新主義に詩人なる新體の歌に八

司と兩方の港に粘りついて、如何にも凍けて離れない、霧のなかから最早兩方の火が海を隔て、天河を中にした星のやうに輝く、それに出る船、はいる船、とまる船幾百の帆檣に紅白の火をつけて、大阪以西第一の繁華を誇る港は、今日の大晦日の故で一層の活氣を帯びてゐる。(小説船路)

●洪水

後藤宙外

車軸を流すやうな雨が、晝夜降り續いて、二日目の午後に至つて尙止まず、吾妻山系統の山々溪々より押しよせてくる水、長瀬川に集注して溢れ漲り、山手の村々は今や洪水に浸され、遠近相驚しむる警鐘亂打の聲と共に、橋落ち家流れ人畜溺れ、救を求めて叫喚號哭する響、物

早稲田派の小説の編者としての名実の一致
小説の體裁の一致
時代的文體の一致
實質的文體の一致
美文の體裁の一致
美文の體裁の一致

凄いことであつた。我が赤穂村は讒に不斷紀知右衛門が（人の名）心を用ゐ、金に飽して築きあげた大堤防の御蔭で、辛くも洪水の來襲を脱れ、だが、北の第一水門の際から、少し潰れ始めて、油断をすれば、全村、今にも泥海にあらうも知れぬ、との急報が村中に傳つた。（小説公民）

茲に惹いた言文一致の文例は、皆小説より採萃したものである、けれども又以て、文一致の美文とは、如何なるものあるかを判明し得るに足らん。

以上列記したる時代的差違の文體と、實質的差違の文體とは、盡く一二例をあげて是を説明したり、勿論文の質よりいへば、此作例の中にて、敘事文に屬するもあり、紀行文に屬するもあれど、たゞ美文あるものゝ如何あるものあるかを容易く了解せしめんがため、諸種の作例を挿たるなり、されば次章以下に於て説く所の敘事文、紀行文等の中には全然美文の領域に屬するもの

の多くあるべし、然れど美文とは敘事の外に必らず何等か美ある分子の要素を具へざるべからざるものあるにより、以下の紀行、敘事等とに分類したる中にて、此區別はよく胸腹に藏しかくべき事ありとす。

第二章 論文

論文も亦散文の一種にして、ある事象若くは事件等の問題を捕へ、其是非曲直または自己の所信を論断する所の文章あり、即ち思想の斷定を口にして、人の耳に懸ふる代りに、是を文章とあして、人の視感に映せしむるものあり、是を論文といふ。

かるが故に論文は、其論する所の趣旨が、讀者の腦裡に透徹する事を以て最

何ぞや
論文とは
己の所信
を論断す
る所の主
観的文章
なり
論文と美
文

論文の主眼點

論文の第一義は文飾にあり、其の透徹にあり

美文と論文との異なる點

論文を作る心の心得

肝要とす。美文の如く文の詩的趣味を以て重しとあらず、縦し其文は美からずとするも、意義即ち論旨が萬人に首肯せらるれば、論文の第一義は其目的を達したるあり、如何に文美しくとも、其論ずる所の趣旨が、支離滅裂して歸着點を捕捉し難ければ、這は論文として成効したるものにあらず、所詮論文は文の装飾が第一義にあらずして、論ずる思想の透徹、即ち文の明晰が第一義あるあり、ある意味に於て美文が感情的なれば、論文は理性的あり、美文はより多くの目的が人の感情に投合して美感を起さしむるものなれば、論文はより多くに於て人の理性が支配する判斷力に惣ふるにあり、此點に於て美文と論文とは全然目的を異にする。

されば、論文を作らんは是のものは、まづ論すべき問題に就いての见解を、文とあすに際し、如何にせば、其論旨が完全に透徹し得らるかといふ組織

論文の第二義は文飾なり

論文は美辭佳句より、熱血を充すにあり

論文に適用する文體は、漢文の特色を論ずるは、漢文調を撰ぶにあり、其の透徹にあり

を致へざるべからず、固より讀むものをして其論旨に同化せしめんと欲するほどのものならば、勿論文を飾りて其論旨の感興を助くる方便とせざるべからず、されども是は全く第二義の方便あり、論旨を透徹させんとする目的に伴ふ方便的手段あり、されば同じく文を飾るとしても、論文に要する所は美辭佳句にあらずして、熱血あり活生氣あり、艶ある文字よりも、血ある文字を要す。閑文字の駢列よりも、寸鐵杖人の警句を要するものあり。

此意味に於いて、論文は文の特質として漢文調を撰むを利とす、元來漢文は剛健にして意氣あり、簡潔にして力あるもの、和文は艶麗にして柔弱あり、されば、論文の如き艶麗よりも堅健を尊む文には、女性的の和文を撰むよりも、男性的の漢文調を撰みたる方遙に利ある所以あり。

さてかくの如くにして、論文を作るには文の装飾よりも意の透徹に重を置く

の必要

論旨を透徹せしむべき方法に如何

論理學の一斑

論理學とは何ぞや

論理の方法

ものある事を了解し、文の種類も和文調を撰むよりは、漢文調を撰むの得策ある事を知りたる上は、次で來るべきものは其意を透徹せしむべき方法の如何にありとす、這は文を學ぶ以外に他の學をささるべからず、そは他を論理學の一斑あり、論理學とは事物の眞、即ち如何なるものが窮極の眞理なるかといふ事を、理論に依りて案出しつゝ窮むる一種の哲學あり、されど這は初學の士には、其詳をいふも、よく抽象的の空理を理會しがたかるべきにより、たゞ簡單に説明しかくべし。

論理學の素養を抱いて、論文に是を應用すれば、論旨の透徹は必らず期して得らるゝものなれど(論旨の可否は別問題あり)、是を應用するに至るまでは尙幾多の修養を要すべきにより、初學の士には能ふべからざる事とす、依て實用し得らるゝ範圍にて、是を教ふれば、左の如し。

歸納法と演繹法

演繹法とは如何
アリスト
テガルト

論断の前提

元來論理學には二個の方法ありて、一を演繹法といひ、他を歸納法といふ、共に我が日本には最も新らしき學問にて、西歐文明の餘澤より受けたる恩恵あるあり、演繹法は歐洲古代の文明國たる希臘にて、碩學アリストートルの發見したるものにて、後十七世紀の頃、佛蘭西の哲學者デガルト氏によりて完全したる推理の方法にして、論せんとする問題に對し、是とか非とかの論断を下すに、まづ是をあらば是なりといふ前提を置いて、何故に是あるかといふ事を、序を追ふて推理し來り、是を演繹しおし擡げて論定をなすものあり、例へば茲に一人の男あり、賢あるか愚あるかといふ事を判断論定すると假定して、此方法を以て論ずるには、まづ賢ありと思へば賢ありと論定しかき、是より幾多の行為若くは其他の論證によりて證明せんとするものなれば、必然の結果として論旨を擴張せざるべからざるに至るものあり。

歸納論理
とは如何

綜合論理

初學の士
のとるべき
方法

歸納法は、十七世紀の頃、英の碩學ヘーゴン氏に依りて發見せられたるものにて、是は歸納して論定をなす、論せんとする問題を捉へて、まづ其形式と實質とを見、諸種の現れたる形を綜合し來つて、比較し見たる後、其論旨を一個所に歸納即纏めたる結果を以て、成程是は善ありとか悪ありとかの判定をなすものをいふ。初より善悪是非を説かず、論じ來りたる結果の上に見て其斷定をなすものをいふ。

まづ單簡に此二つのものを説かば斯の如し、されど這は嚴重にして恰當の解釋にはあらず。單に應用的の説明なれば、其詳を知るには尙論理學に就いて見るを良しとす。

然し乍ら、這は初學の士には却て思想の混亂を來すべき處あるにより、最初はたと思ひのまゝに論ずるを可しとす。されど、徹頭徹尾、其論旨の明晰

事物の眞
理は自然
の法則に
適す
論文は筆
端に拘束
せざるを
可とす
論文の種
類
批評文は
冷靜なる
をよとす
檄文は強
き反響を
興ふるに
作成すべ
し

と透徹とは初より忘るべからざるものなれば、是は大に注意を要す、敢て論理の致ふる法則に依らずとも事物の眞理は自然に此法則に協ふべければ、初はたと忌憚りて縦横に論せんとする主旨を發揮する事に努むべし。習熟の後には自然大議論も得らるべし、唯論文に尊む所は、成るべく筆端の拘束せられざるを期するにありとす、學ぶもの心せよ。

論文にも亦幾多の種類あり、其種類によりて作意に多少の差を生ず、たとへば批評文の如きは、ものその是非を判定するものあるにより、努めて冷やかなの思想を以て文に向ひ、感情に依り動さるゝ如き事あるべからず、されど是に反して檄文の如きは、最も強き反響を讀むものゝ、頭腦より惹き出さるべからざるものあるにより、極めて感情的に熱血を瀉ぐの概あるを要す、是等は其文の質によりて、大要を判斷し、作成する以前、豫じめ覺悟すべし

情熱的
文字
的
論文作者
の
範圍

論文と時
世

北島親房
の
神皇正統記
の
論文
は
洗練
者
に
多し

とは情熱的の文字と冷静思索的の文字とは、其立場に差違あるを以てあり、尙作例の適切なるものに就いて、以下辯ずる事とせん。

然りと雖も、論文は前述の如く、其論文として一個の體をなすに至りしは、最近の進歩にして、古くにては多く見るに足るものなし。這はすべての事象が進歩するに従ひ、善と惡との二面が、増々複雑となりたる爲、後世に至るは、是を辯ずるの必要生じ、茲に始めて諸種の論文を時世が生み出したるものあるにより、従つて古代には論文として見るに足るほどのものなく、作家としても全時代を通じて多くの論文家を見ず、鎌倉時代に於ける北島親房の神皇正統記の文の如きが、まづ古文中の議論として見るに足るものあらんか、故に論文の古き作例は多く漢學者の手にありて、和文學者には尠し、従つて作例の如きも、古代よりは近代に力を竭て、其多くを載す事とすべし。

◎論文作例

●奉公は人臣の義務

北島親房

凡そ王土に生れて、忠をいたし、命を捨るは、人臣の道あり、必らず是を身の高名と思ふべきにあらず、然れども後の人を勵し、其跡を憐みて賞せらるゝは、君の御政あり、下としてきはひ争ひ申すべきにはあらぬにや、ましておせる功なくして、過分の望をいたす事、みづからあやふむるはしなれど、前車の轍をみることは、まことにはありがたきあらひありけんかし、中古までも人のさのみ豪強あるをば戒められき、豪強にありぬれば、必らず驕る心あり、果して身を滅し家を失ふためしあれば、いましめらるゝも理あり、鳥羽院の御世にや、諸國

北島親房の神皇正統記の論文は洗練者に多し

きほひと 自負する 事 中古は 平安朝 源平家 武臣と 馬の權を 握り其勢 盛つては 力争ひを 自の武士 下に配を せしむる 張る勢を 生るるに 制符を下

の武士の源平の家に属する事をとゞむべしとの制符、たびくありき源平久しく武を乗りて仕へしかども、事あるときは宣言を賜はりて、諸國のつはものを召し具しけるに、近代もありて、やがてかたらはる輩多くありしによりて、此制符を下れき。果して今までの亂世の基あれば、いひ詮なき事にありにけり、此頃の諺には、一度軍にかけあひ、或は家の子郎徒節に死ぬるたぐひもあれば、我が功におきては日本國を給へ、若は半國を給はりても足るべからずと申める、まことにさまで思ふことはありしあれど、やがて是より亂るゝ端ともあり、また朝威の輕々しさも、おしはからるゝものあり、言語は君の樞機ありといへり、あからさまにも君を蔑にし、人に駭くことばあるべからぬことにこそ、前に記し侍りし如く、堅き氷は霜を履むよりいたるま

きほひと 自負する 事 中古は 平安朝 源平家 武臣と 馬の權を 握り其勢 盛つては 力争ひを 自の武士 下に配を せしむる 張る勢を 生るるに 制符を下

らひなれば、亂臣賊子といふものは、そのはじめ心詞をつゝしまざるよりいでくるあり、世の衰ふると申は、日月の光の滄るにもあらず草木の色の改るにもあらじ、人の心の悪しくあり行くを、末世とはいへるにや(申略)ちかき代の事をかじ、頼朝の時までも、文治の頃にや奥の泰衡を追討しに、自ら向ふことありしに、平の重忠が先陣にて、其功勝れたりければ、五十四郡の中、何を望むべかりけるにや、長岡の郡とて、極めたる小さき所を望み給はりけるとぞ、是は人に弘く賞をも行はしめんがためにや、賢かりける男の子にこそ、また直實といひけるものに、一所をあたへ給ふ下文に、日本第一の剛のものあり、と書て給はりけり、とせかの下文をもちて奏聞する人のありけるに、褒美の詞のはなはたしさに、興へたる所の少くあさ、洵に名を重く

の光の漸くなるにあらざる草木の變化あるにあらざる人の心之感化を受くる論にありと論ずるの泰衡陸奥の泰衡首藤原泰衡なりと實また直實といひけりとの直實は黒谷次郎直實は中一とせば一統のしはるべき云々天皇中興の業をなす

して利を軽くしける、いみじきこと口々にはめめへりける、いかに心得てはめけんといとおかし、是までの心こそあからめ、事にふれて君をおとし奉り、身を高くする輩のみ多くあり、ありし世の東國の風儀もかはりはてぬ、公家の古き姿もあし、如何にありぬる世かと、歎き侍べる輩もありと聞しかど、中一とせばかりは、まことに一統の志るし多くて天の下こそぞり、集りて都の中、はへぐしくこそはべりけれ。(神皇正統記)

此の文は北畠准后親房卿が、南朝の反臣尊氏に苦められつ、光を北朝に奪れんとする時に當つて、武事に忙しき間、筆を馳つて草したる神皇正統記中の尊氏を論じたる一節にして、頗る長編のものあり、されど今は其一節のみをとりたるにより、前後の關係明瞭を缺きたれど、論ずる趣旨はよく透徹す

して北條天を誦し統したる一統のしはるべき云々天皇中興の業をなす

るあらん、此文は今より五百年ほど以前のものにて、論文としては未だ強烈の概なきも、穩健にして餘裕あるものといふべし、古代の論文の模範として誦しかくを要す。

●漢文章の變遷

室 鳩 巢

西漢の文章は、秦疏制策の外、賈誼の過秦論、司馬遷が「任安に答ふるの書」、司馬相如が「巴蜀に論すの檄」、揚雄が解嘲、此類猶多し、其文大抵雄偉高邁、後人の及ぶ所にあらず、東漢以後文章衰弊して振はず、六朝に至りて四六俳偶をもて工とせしかば、規模蕩盡し氣象萎蕭して觀るに足るものなし、唐に至りて其餘習未だ除かざりしに、韓退之柳子厚の二子、何れも超絶の材を以て一生の力を盡し、古今の言を陶

秦の後に漢の統制を承継する高祖の下の買取史司馬遷史公の選古史支那の歴史家如司馬相如の長詞賦の美を所謂したる楊雄の四家文の漢末代の西漢の反客と代の東漢の反客とを弄する人王の東漢の後光武の下の天

露して、自ら機杼を出しければ、其文上西漢を追ひて殆んど過ぎたりともいふあり、東坡が韓文公の碑に文起八代之衰、道濟天下之溺、といひしが、道は天下の溺れたるを濟ふは知らず、文は八代の衰へたるを起す、といへるは異論なき事あり、誰かしからずといふべき其後五代を経て漸々衰へしを、歐陽、東坡の二子相繼ぎて出で、振起せしかば、文章再び古に返りぬ、其文光明正大、又韓柳に追配して差ぢざるべし、是を以ていふに韓、柳、歐、蘇は、文章家の大宗あり古今文章に於ては一人の非議するものあるを聞かず、されば明朝に至りて、詞臣文士多く出で、文章世に盛ありしが、劉基、宋濂、李夢陽、何景明が徒、名を一時に擅にし、大家と稱せしかども、韓柳歐蘇が文に於ては、一言も附議を下す書なし、かもふに深く慕尚して欽服しけ

唐の漢文の統制を承継する高祖の下の買取史司馬遷史公の選古史支那の歴史家如司馬相如の長詞賦の美を所謂したる楊雄の四家文の漢末代の西漢の反客と代の東漢の反客とを弄する人王の東漢の後光武の下の天

るらし、其外文章をもて開ゆるもの、唐順之、王慎中が徒、各々一家の言を立つと雖も、何も韓柳が道流を汲み、歐蘇が得波を擧げざるものある、然るに文章は時運と盛衰するものなれば、明の中葉より以後稍衰へ行くはどに、平易なるは鄙俚となり、簡古なるは割竊となり、夫より天下の文章科舉帖括の習に落ちて、是を時文と稱せしかば、古文は見るべからざる事にありたり、此時に當りて古文に志ある人、世に輩出して、復古矯俗に急かりしも、韓柳歐蘇が文をこそ赤幟とせしが、篇毎に揄揚し、句毎に品深せざるはなし、しかはあれど才識高からず、蘊蓄深からざるによりて、そか所作の文を見るに、古に似て古にあらず、雅に似て雅にあらず、最後は李攀龍、王世貞出で、その平易にて膚俗に近きを厭ひて、相與に奇怪の文を造作し、狂蕩の論を濫

家なれど
以上名士
に及ぶ
服はよ
る事
服す
郡は
や事
る事
す事
料事
は事
試事
具事
下事
事
て事
り事
い事
ふ事

張し、洗洋自ら恣にし、一世を鼓動せしかば、四方の文士靡然として
歸依せしはせに、號して文章の主盟と稱しき、されば滄瀛鳳洲も常に
韓柳歐蘇が文をば褒稱して終に非議する事を聞かず、鳳洲は晩節に及
びて、文友と文を論じて、やゝ後悔して、平生にかへる志ありしか
ども、及ばざりけるよし、饒謙益が列朝詩集に見えきとおぼえ侍り、
然るに今文章を以て自ら許す人の、王氏が棄餘を拾ひて、彼が四部稿
を師祖とすで見れば、又鳳洲が心にたがひて、反りて韓蘇を毀るこそ
いと意得がたけれ、定めて深き意もあるにかあらん、翁やどが小兒に
てしる可き處にあらず。(附註)

●世の變遷

新井白石

鎌倉殿は
源頼朝の
事外祖は
力の父
文徳は天
皇の御名
朝家は日
云々天子
本は天子
三種の神
器を傳承
すの故に
持のてを
虚なき故
ふ物を論
たる文

鎌倉殿、天下の權を分たれし事は、平清盛、武功によりて身を起し、
終に外祖の親をもて、權勢を專にせしによれり、清盛かくありし事も
上は上皇の政みだれ、下は藤氏累代の權を恣にせしに倣ひしによれる
あり、されば、王家の衰へし始は、文徳幼子をもて世嗣とあされしに
よれりとは存するあり、尊氏天下の權を恣にせられし事も、後醍醐中
興の政正しからず、天下の武士、武家の代をしたひしによれるあり、
尊氏より下は、朝家はたゞ虚器を擁せられしまゝにて、天下は全く武
家の世とはありたるあり。(讀史餘論)

此二例は事物の實相を捉へて、是を敘事し、其結果によりて、論定をなした
るものにて敘事的論文ともいふべきものあり。

●爲朝は大島に死せり

西田 眞義

鎮西八郎爲朝は、大島にて自殺せしといふは偽にて、實は其節琉球に渡りし」といふ説あれど、彼の國に渡りしことは眞あれども、そは在島中の事にて、官軍をさしむけられしときは、切腹せし事疑なし其證をいはん、中山世譜に曰く、舜天王、姓は源、尊敦と號す、父は鎮西八郎爲朝公、母は大里按司の妹、宋、乾道二年丙戌降誕す、宋、淳熙十四年丁未位に即く、宋、嘉熙元年丁酉薨す、位に在る五十一年壽七十二とあり、此乾道二年は、即ち六條天皇の仁安元年にあたりて爲朝未だ大島に居住せし時あり、保元物語卷三に、永萬元年三月、爲朝鬼島に渡りしといふ事あり、是れ即ち南洋ある鬼界が島の事にて、

世に鎮西八郎爲朝は、大島にて自殺せしといふは偽にて、實は其節琉球に渡りし」といふ説あれど、彼の國に渡りしことは眞あれども、そは在島中の事にて、官軍をさしむけられしときは、切腹せし事疑なし其證をいはん、中山世譜に曰く、舜天王、姓は源、尊敦と號す、父は鎮西八郎爲朝公、母は大里按司の妹、宋、乾道二年丙戌降誕す、宋、淳熙十四年丁未位に即く、宋、嘉熙元年丁酉薨す、位に在る五十一年壽七十二とあり、此乾道二年は、即ち六條天皇の仁安元年にあたりて爲朝未だ大島に居住せし時あり、保元物語卷三に、永萬元年三月、爲朝鬼島に渡りしといふ事あり、是れ即ち南洋ある鬼界が島の事にて、

それより程近ければ、やがて琉球に渡りて、彼の國を押領し、その處の婦人と通じ、烈仁安元年に舜天王をば生みしあり、其の證は世譜に乾道二年降誕とあればあり、又一つの考證あり、琉球神道記といふ書に、中ごろ鎮西八郎爲朝、此の國に來りて逆賊を成し、今鬼神より飛礫をふし、亦此に留りぬ」といふ事が出たり、今鬼神とは、琉球の近邊ある島と見へて、僅か一日の行程の處あり、是れ紛ふべくもあらぬ鬼界が島にて、即ち萬元年に渡りし鬼が島あり、然るを、世に大島にての自殺をさにはあらずとて、保元物語を疑ふ人のあるは、傳信録、

國史略等に、朝公とて爲朝の事の出でたればあり。(櫻々筆語)

子なりと

これはやゝ演繹法に似たる論文あるべし、爲朝が大島に死したるや否やを疑ふものゝ爲めに、其死せしといふ事を論斷したるものにて、最初に「切腹せし

頼朝の御爲に
義経終に頼朝に背き
たり、さらば、頼朝の彼を誅せんとせし事、理ともいふべしといふ。
然るにはあらず、義経始より二心あり、たゞ頼朝の奸計ある事を知ら
ず、古へ頼朝、頼親、頼信が如く、義家、義綱、義光が如く、兄弟共
に朝の御守たるべしとのみ思ひて、頼朝の代官として義仲を討ち、平
氏を敗りし後、京師を守護して院中に伺候せり、然るを頼朝不快の氣
色ありしかば、如何にもして其心をとらんと思ひき、されば範頼平氏
を敗る事の叶はざるに及びて、義経讃岐に向ひし時、渡邊にて風荒く
渡高きに真先に船を出す、大藏卿泰經是を諫めしに、義経殊に存念あ
り、一陣に於て命を捨てんと思ふといひき、其の志、若し此度の軍に

即ち機嫌
を直す事
幾通の起
清文とば
義経平氏
を滅して
鎌倉に人
を越えし
る頼朝景
命を許さ
ず入る書
僅に書を
得たり手
終に討手
たし向
僧の義
を頼朝の
弟に頼朝
の義経は

克つ事を得ずんば、最初に討死すべし、若し勝つ事を得ば、頼朝が心
も和らぎふんやと思ひしにあらずや、かくまで頼朝が爲に心を盡し
ぬれど、頼朝更によしと思ふ心もなく、平氏滅びし日、速かに其兵權
を奪ひて召還す、此後幾通の起請文を以て、二心をきよしを申せしか
ども、更に許さず、終に討手をさしむけたり、此時義経自ら首刎ねて
其年頃の志を表さんはいざ知らず、其餘は自ら死を救ふの謀を出さん
にはしかじ、義経院宣を申請けし事、止む事を得ざるに出でたり、其
志の如きは憐むべし、或人惟らく、義経其志驕りて勇を恃みき、自ら
其禍を取れり、且加ふるに景時が讒を以てすといふ、是も亦頼朝に黨
するの説あり、範頼が愿にして怯るも、終に死を免れず、其死せし
時、誰か彼を讒せし、惟ふに唯頼朝が如き者の弟たらん事、最も難し

院宣の令は 旨即ち頼 命書討の 新非君石 名は君石 起り幼より ありて大志 順庵の門下 監の譽高 藍の譽高 くに終に 從府に 從府に 位下五 守と代 元と代 學と代 妙文に巧

どこをいふべけれ。(讀史餘論)
這は史的人物を論ずる文の一例として示したるものあり、されど人物を論ずるには、區々の標準あり、例へば其人の性格を論ずるもよし、品性を論ずるをよし、將たまた行爲を論ずるもよし、たゞ一つ中心點とすべき標準を捕へて、是より四圍の事情を割出し、以て再び中心點に歸納し來るをよしとす前例白石の頼朝を論じたる中心點は其性格あり、其性格より生み出されたるものを、性格の胚胎に歸し、ある事情を以て是を辯護をせんとするも一切性格に歸して、辯護を非認したるものあり、即ち義經を陥れたる四圍の離間其他の事情によるにあらざして、頼朝夫れ自身の性格があらしたる事にて、たとへ如何ある事情あるも最初より義經を陥れんとしたるものありといふにあり、是を此の種の論文の特色とす。

史論人物 人物論の 人物論の 中心點 頼朝論の 新非論の 標 近體文の 例 月氏は 六等 者たり 異人なり 其の文に 文藝の一 風の文を

以上擧げたる數例は、近世徳川時代の始に於て、文學復興の餘波として、論難の筆漸く進歩したる時代に於ける論文の例あり、以下現代に於ての論文を見んため、近體文のものを摘出し見ん。

松居松葉を論ず

伊藤銀月

萬朝報に松居松葉あるは、米の飯に砂の雜る如く齒障り也とあすものあり、乾ける絃に濕りを與ふるが如く、緊縮せる調子を緩むるものとあす人あり、甚だしきは松葉道人、松葉居主人、まゝ、松生、小生等の彼が雅號、別號の、何故に速に萬朝報より消え去らざるかを怪むものあり、然りと雖も、彼等は單に美文家小説家としての松葉を知るものにして、新聞記者としての松葉を知るものにあらず、雅號、別號を

墨岩周六
は萬朝報
の社主兼
社長なり

先天的に
生れなが
らといふ
に同ト

標榜せる彼を知るものにして、雅號別號を標榜せざる彼を知らざる者也。萬朝報記者としての彼が價值を評論すべき資格無きもの也。人を知らずして人を是非す、無責任も亦極まれりといふべし。松居松葉を侮辱するの甚だしきもの也。而して實に墨岩周六を侮辱するの甚だしきものあり。其多趣味にして何んでも御座れある、其鋭敏にして悟りの早く呑込みの早き、其よく喋りて臆面のなき、其筆を揮ふ事飛花落葉の如くにして千篇立どころに成る、其ハイカラにして人より先に新らしき趣味を捉ふることを好む、松葉は實に先天的新聞記者なり、萬朝報三面雜報の、時として才華爛熳、筆痕水の滴るばかりに美しく、而も諧謔あり、諷刺あり、讀去つて極めて齒切れのよき覺ふるもの其多くは——寧ろ殆んど總ては彼の手に成れるもの也、小説家ならず

かざせら
るるは替
の花が婦
女の頭を
ささいに
其華を現
はさるゝ
如く然り
といふ意
なり
チツクダ
イは洋服
の飾りの
二番目の
音羽屋的
音羽屋上
菊上郎は
佛佛尾上
音羽屋と
いふ其技
藝に入町
人なごの
意氣な姿

美文家ならず劇評家ならずる彼、雅號をも別號をも標榜せざる彼は却つて萬朝報に替せらるゝの花あるあり、墨岩周六は人を見るの明無きものにあらず、彼を惡むものはいふ、松葉は氣障也厭身也なりと氣障とは何ぞ嫌味とは何ぞ、モミアゲを剃り落し、頭の毛を焼く事あるべし、變ぢチツクマイを着け變ぢ帯を締むることあるべし、二番目の音羽屋的姿勢を作る事あるべし、時と場合を顧みず、マツ／＼と喋りて差出で口を利き、知つた振りをしたがることあるべし、是を氣障といふか是を厭身といふか、氣障とは今少しく油つこく厭味とは今少しく毒々しからざるべからず、彼は氣障といふべく餘りに罪無く、厭身といふべく餘りに無邪氣也、彼を氣障といひ厭味といふは、長田秋濤を氣障といひ厭身といふが如し、彼等は俱に嬉々たる昇平の民のみ、云

に掛る
芝居に
すは二
て目も
番目も
と意が
に人を
る人を
いふな
いふな
是曲の
筆江を
長田秋
は早稲
大學の
師に講
文學者
種族的
は血す
といふ
個體的
人は自
人だけ

はるゝ者の氣障厭味あるにあらすして云ふものゝ氣障嫌味あるのみ。』
要するに松葉は東京ッ兒也。彼はズウ／＼詞の仙臺に産聲を擧げたり
と雖も、純然たる江戸ッ兒の血統にして、幼時より東京の水を飲み慣
れし者也。彼の輕佻は東京ッ兒的輕佻也。種族的輕佻にして固體的輕
佻にあらざる也。東京ッ兒及東京ッ兒と交際するの趣味を解するもの
に問へば、彼の無邪氣にして愛すべきを知るのみ、彼の氣障にして惡
むべきを覺えずといふ、即ち知る、松葉が爾く氣障として惡まるゝ所
以は、文壇に跋扈するもの多くは田舎漢にして、既に東京ッ兒趣味と
反りが合はざる故に東京ッ兒文士たる彼と反りが合はざるを、松
葉時に逢はざる也。』松葉に美質あり、人を遇すること公平にして、人
の能を揚ぐることを好む、彼が團十郎を重んじて菊五郎を喜ばざる如

眼るの意

律語的小説
文に調律
あるをい
芝居の筋
脚本と筋
書なり筋
ひは同し
みは同じ
いやふ味

き、己れと同じ者を受するの小人たるを免れ得べきか。

●淨瑠璃と脚本の別

坪内逍遙

世人或は淨瑠璃をドラマと同視して(或はドラマを淨瑠璃と訓じ)近松
の諸作をドラマと心得たるものあれど、恐らくは僻事ひがことあるべし、淨瑠
璃は一種の律語的小説、即敘事詩の一體と見るが至當あるべし、若し
其劇に演せられし故を以て、強て脚本視せんとあらば、特稱して敘事
的脚本を名づくべくや、敘事詩には地の文あり、ドラマには地の文
なし、ドラマにも時としては、序曲又は跋曲はくを譯すべき本曲外の
文句もあれど、それらは我が淨瑠璃の地とはひとしきみに見做しがた
し、或はかくいはず、淨瑠璃を挿入するは、我が劇の特質也、現に今

大に著述
をなす氏
の文は熱
血を以て
鳴るべし
社交とは
世の中の
交際をい

▼第二編 散文 第二章 論文

の安息日也。命の洗濯する時也。萬事を打忘れて樂しむべし。屠蘇も
飲むべし。雜糞も食ふべし。かるたも取るべし。羽子もつくべし。年始
に廻るべし。謹賀新年の端書も出すべし。かくて社交をも温むべし。』
要するに、正月や、元日を祝ふにあらず。正月や元日を利用して、數
日間を愉快に送り、以て浮世に苦闘する身の精神を慰むべきなり。一
年中に正月あるは、一週に日曜あるが如し。日曜や正月や、是れ人を
して安息せしむるの意に外あらず。よくつとめ、よく遊ぶ、是れ人生
の要義也。たゞ余の一身にとりては、稍世人と異り、余に日曜なく正
月なし、書を讀み終り、之をつくり上げたる時が日曜也。又正月也、
一日閑あれば、一日遊び、十日閑あれば十日遊ぶ、成るべくあらば年
始の廻禮はやめたく、謹賀新年もかきたくなし、されば、これまで。

連年、近縣旅行とかいふものに出掛けたりしが、今年は錢をさまゝに
家にとちこもれり、賀正の端書来る毎に之に酬ひたり、たゞの端書あ
らば、たゞの端書、繪葉書あらば繪葉書を用ゐたり、中には小兒が持
行きたるまゝに紛失して、返書を送るに由なきもの少からず、余が返
書を出したるに、先に出したる事は忘れて、再び賀正の端書を送りた
る人も三四人はありたるやう也。世の中には虚禮も必要也、少し面倒
あれど、賀正の端書は、つとめて多く出すがよかるべしと思ひぬ、正
月にあらぬに、到着したるもの、二三はありたり、這は特別に注意を
惹かむとて、近來の流行あるが、ちとふざけ過ぎたり。』この上の註
文には、今の正月は時節が悪し、冬の寒さ最中に、お正月とは、餘り
有難からず、舊曆の正月も未だ早し、政府の會計年度も、中等教育以

▼第二編 散文 第二章 論文

下の學年も、二月末日を以て限りとする事也。何と、お互に申合せて
花笑ひ、鳥鳴く四月の始頃を、假りに元日とする譯には行かぬもの
や。

近體論文
の各論
人物論
和文調
論文調
漢文調
俗語的論
文
の論文一致

現時に於ける論文は概略斯の如きものあり、松葉論は人物の評論をなす模範
として見るべく、脚本論は稍々和文調に傾きたる、穩健の理論文として其種
の體を伺ふに足るべし、三成論は漢文調の頗る感情的なるものとして、議論
の摸型とあすを得べし、最後の新年は俗語を交へて、縦横にいひ現したるも
の、四例 盡く皆其筆致を異にす、就きて熟讀すべし、尙近體文特得の一體
たる言文一致の論文に就いて、其作例を示すべし。

●私徳と公德

坪内逍遙

躬行とは
自分自身
に行ふ事

道徳と一纏にして用ゐられてゐるが、引離して見れば、道は人間の履
むべき道、徳は人間の具ふべき徳、此二者を兼ぬれば先づ間然する所
はない、併乍ら道徳といふは空名即形式で、其内容の何たるかを明か
に心得ぬうちは、我々どもの躬行の助にはありませぬ、如何にするが
人間の道であるか、如何なるが人間の徳であるか、あらかたあたりとも
其實態を取調ふる事にかゝらねばならぬ、近來徳を二大別して公德、
私徳と名稱する事が行はれる事があるが、其所謂公德といふものはど
ういふ徳であるか、私徳といふのはどういふのであるかといふことに
付ては、人々に依つて多少解釋が違ひ、それが爲め不便宜も尠からぬ
まづ是から調べねばなるまい。〔中略〕段々説明して往きませうが、あ
らかじめ一言注意しておきます、更らに進んで私徳の定義をどう立て

るかと言ふに、私徳といふは、「私情に因縁せる徳あり」と斯様に申し
た方が穩當であらうかと考へられる、私情に因縁するといふ事は、「私
徳は即私情あり」といふ意味ではない、此點は大切を區別だから能く
會得して貰ひたい、一躰私情といふ事は、從來の道德見では甚だ賤し
い事と見做されてゐるが、其賤しい方の意味で私情に因縁すと説くの
ではない、然しながら其由つて來る所を尋ねれば、私情といはんけれ
ば正當には説明が出來ぬと申すのである、蓋し私情に因縁するといふ
のは、「自己に特殊の縁故關係情誼ある或的確なる個人若しくは團躰に
對して守るべき意志及び行爲の良習慣」といふ意味である、個人若し
くは團躰と申したのは、一人でも、二人でも、三人でも、或は團躰を
あしてゐても構はぬ、私徳は必ずしも個人に對してのみ言ふのではな

「重野成齋博士は文學史に
著して歴史を著すに
家内閣長を著すに
修史局長を著すに
たりたりと著すに
なりたりと著すに
ありありと著すに

い、私徳の中にも團躰に對する私徳といふものがあらうと思ふ、其處
が普通の解釋と異なる所である。(實踐倫理)
爰に引たる例は逍遙先生の講義にして、純たる言文一致の論文にあらず、さ
れど、講義はもと解釋するものにして論を意味す、殊に此編の如きは正に論
文の一例として見んに、極めて適當なるべし。

●崇の字と其意味

重野成齋

抑も崇の字は、よく崇の字に間違つて書いてあるが、是は凡で別を文
字で、崇といふのは、示の字の上に出の字を書いたものである、此示
といふ文字は、二の下に小と書くので、二は即上、小は即下である、
上の下に小、是を日月星といつて、天地萬物を主宰する所の象である

どはきず
だらけ
大坂市の
歌は一月
年朝日新
開社が五
百圓の費
金を集め
たるも一
なり其當
なりは當
柳安次郎
とて師範
校の教
授なりと
か歌の全
休は左の
如し
第一節
浪は生駒
の静け山

瑕の痕、滿々たりと言はねばならぬ、して見ると、此歌の價值は、情けなくあるのである。漫りに罵るものと思はれるから、こゝに實例を擧げて、其疵瑕を指摘して見やう、先づ第一節の劈頭、「霞こめたり生駒山。浪は静けし茅渚の海。」と起した此對句が違つてゐる、上を「霞こめたり」と言へば、必ず下を「浪靜まり」と言はねばならぬ、作者はとまれ、選者は、まづ此見易き對句法を知らないと見へる、又次の「三州の野の末遠く」も變手古で、「浪華の春は夢みらず」も可笑しい、そして「あゝ麗はしき大阪市」と結んでゐる、何が故に麗はしきか、茫漠たるも亦甚だしい、次に、第二節の「泊りはてけむ大伴や」とある、「泊りはてけむ」が可笑しい、泊りもはても同意義であるのを知らぬのだらうか、「泊りはてし」と續くべきものと思つて

海野の三州
遠のたて
り大都會
る大都會
織並み高
て華み立
華の春は
悲なるは
はあゝ麗
はしき大
阪市の
第三節
ねねのふ
ねねのふ
ははのむ
大はつむ
みつむむ
松長への
の松長への
の松長への
の松長への
の松長への

るのであらうか、それから「みつの濱松長しへに」より以下、純然たる淨瑠璃調である、「楫緒もはさぬ大みあと」楫緒もはさぬといふ文句があらうか、又また築港も出来ぬ大阪を、大みあとと言つたのが、頗る可笑しい、而して、作者は例に依つて、結んで曰く「あゝ賑はしき大阪市」と、予は其何が故に賑はしきかを知らぬのである、次に第三節の「民の寵を見ましけむ」とある、民の寵とは何の事だ、民の寵の寵と言ふべきを、民の寵と省略して通ずるのか知らん、「雲の飾りはやがてこの、民の富あり國の富あり」是も變手古である、第四節の四句だけは感心に整つてゐるが、その次の「市民のかざす旗印」でふち壞した、以上は唯要點ばかりを擧げたのに過ぎないのだ、嚴密に攻めたてたら、完膚なきに至るであらう、あゝ盲目千人の世の中で

ある、這んを疵だらけの拙作を、ヤレ聲調が流暢だの、ヤレ措辭が雅訓だのと賞めたてゝゐる。惘笑に耐えぬ、それから歌一首も作つたことのない木村正辭などに、措辭に於ける責を托した大阪朝日新聞社の眞意が分らない、中村秋香氏でも、落合直文氏でも、斯道の老巧で、かういふ場合には必らず推さねばならぬ人が寡くないのに、あせ木村如き無資格のものを推したらう、果然、斯ういふ失態を來したのである。

是れが言文一致の論文あり、詮するに何も達意即意義の透徹を第一として漫りに文を飾らざる所を知るを得べし、美文と對照し來つて、其間に大なる逕庭あるを知るに足らん。

掲緒しほ
はあ、大港
阪市、大
君高どの
に昇りま
し民の罷
け見の罷
御恩を其
まも、捨
のま、餘
る雲の飾
りは、や
てり、の
民の意な
り、國の
も、あ、大
阪市、大
の月、の
第四節
の月、の

第三章 敘事文

敘事文も亦散文の一種にして、事象を忠實に記述するものあり、敘事文は文字が直ちに現はしたる如く、ある事柄の現象若くは事實を捉へて、是を明瞭に敘するものあり、されば事實を事實として記す事が、此文章の最大要點あり、漫りに事實以外の想像を加へ、事實を闊却して主觀のみに走るべからず。

かるが故に敘事文あるものは、暢達明瞭を主とし、事實の真相を、始より終まで秩序正しく、宛も平板に水を流すが如く、すらく一貫して通せしむるをよしとす。此意味に於て敘事文は、事實の善悪良否に係らず、有のまゝを活寫するものにて、必要に迫られざる限りは、漫りに論評の筆を其中間に

の宮、高津
に、見、秋
尙武の、花
は、金、城、の
天、主、の、知
の、色、に、此
此、花、と、此
月、花、と、此
民、の、か、さ
す、放、し、る
ト、あ、あ、あ
い、ま、あ、あ
き、大、大、大
完、廣、云、々
か、ら、は、完
て、い、ふ、事
き、で、全、事
所、は、更、に、い
ふ、事、を、い

は敘事文と
は何ぞや
敘事文の
最大要點
論評の筆
加ふべ
からず敘
事文と敘
事文の美
化は敘事
文の美
たるもの
ないふ
二種の意
味記事文
亦敘事文
の一種を
り敘事文
範圍及其
種類

挿じへからず、事實の判断、事象の推定をなすは論文の特質にて、敘事文は其敘せんとする事實が、事實を誤ざるやうに必ずを以て特質とするものにて、いはば報道的あり、其是非善悪の如きは、是を讀むものの判断に任せおきて足れるあり、されど、其文を潤飾して事實以外に逸せざる限り、是を美化して美文とあすは毫も差支へなし、そは美文の項に於て説きたる如く、敘事文にして美文とあすものは、即ち敘事的美文にして、事柄の美化し易き性質のものならざるべからず、其性質にあらざるものを、強て美化せんと欲せば、動もすれば事實を開却するの虞あり、故に敘事文あるものは、二様の意味を含む、一は美的にして他は記述的あり。従來記事文と稱する一體あり、又敘事文の一種にして、即ち記述的に屬すべきものあり、されば、敘事文の範圍は甚だ濶くして、美文酌あるもあり、ま

凡ての文は
章の素を
敘事文の
種類及其
比較の比
載異點の
美文酌敘
事文

た枯淡無味の記述報導的あるもある譯あり、後章に説んとする紀行文の如きも、又敘事的美文として、此區別によりては、美文の中に入るを得べく、又敘事文の中にも入るゝを得べし、されど紀行文の如きは自から一體をあせるにより、普通の敘事文と混同し、また美文の中に加へんには、却つて歸着の針路に迷ふべきにより、各一體として類別する事とあしたり。要するに、敘事文はあらゆる文の素にして、多くは皆此中に包擁せらる、されど其内に就いて文の少しく美的なるは美文とあり、實用的なるは記事文とあるものにて、科學的書籍を記載する文體の如きも、また敘事文あり、試みに敘事文の種類に就いて、其異點を比較すれば

●東照宮參拜之記

太田南畝

妻戀稻荷社に、神君の御影ありと聞き
は江戸湯島にあり
神君は
車馬宮徳
事に宮に
川家は
指すは凡
帳の事は
帳の事は
如きも
なかり
はつたり
いふ事
奥内陣
をいふ大

四月十七日、半日の開れば、妻戀稻荷社に、神君の御影ありと聞き
て、うかどひしに、門邊に提灯をたてて、神樂あり、稻荷の神前に
葵の御紋染めたる白き帳をたれ、同じ御紋かきし提灯をたてしのに
て、外に問ふべき人もあければ立出づ、人の多く参りつどふを憚りて
の事あるべし、夫より深川の方へ行く、今の三十三間堂、未だ再建あ
らざりし時、かたへの小さき堂の内へおはします甲冑馬上の御木像は
八幡宮ありといひしが、近頃尊像の御胸に、葵の御紋あるを見出て
是また神君の御像ありとて、私かに人々まうでし事あり、いかどさら
んと思ひて、其堂に詣つるに、戸さして人なし、三十三間堂に立入り
て、見めぐりしに、今の堂の本尊なる観世音の像の、うしろの方ある
内陣に、白き戸張をかば掲げしを、ひそかにうかどひ見るに、正し

ほのぼのの
見か
はほの
なほの
はほの
てなほの
事なり
乘取
燈の
のつ
き多
ふ事
文の
特異
點なる
實用的
叙文

く昔の甲冑馬上の尊像にて、御馬のかたちと、御胸のあたりまでは
の見えしが、御ぐしは帳のうちにかくれて見えず、あらはに拜み奉ら
んも、空おそろしくて、速に立ち出でぬ、されど、今日思ひたらし本
意とげし心地して、南風に薫し、大川を渡りて乗燭の頃、宿に返りけ
り。
美的叙文とは、まづ斯の如きものあり、何處と取出ていふべき美所あけ
れど、文に趣味ありて詩的あるは是れ美化したる證據あらすや、然も東照宮
に参拜したりといふ事を、平易に叙してよく一貫し、毫も批評に及ばず、單
に見たるまゝを敘したるのみ、即事實を事實として記したるものあり。

●水の効用

いたくは
なごいふ
と同一の
意味なり

蒸氣機関
は英國の
鉄道の湯
の沸騰す
るを見ず
蒸氣を發
明すとい
てアステ
ン氏が是

水は常に流動する液體なれど、烈しき寒熱に逢ふ時は、水ども蒸氣と
もなりて、其形いたく變ずるものあり、されば、海河の水も太陽の熱
を受ければ、空中に蒸發し、空中にて寒冷に逢へば、凝りて雲となり
降りては露、若くは雨となり、寒冷の度烈しければ、結びて雪ともな
るあり、今試に一勺の水を瓶の中に盛り、是を火の上に置き置れば、熱
を受くるに従ひて、終に沸騰し、瓶の口より蒸氣を洩して、その蓋を
も動すに至り、瓶の水は蒸發し、減りて終には盡きぬべし、蒸氣機關
は此理を推して製れるものあり、蒸氣の機關、世に出でより、その
力の強大にして、運動の自由なるを利用し、之を用ひて鑄冶すれば、
鐵を操作する事綿よりも易く、紡績すれば、糸を抽く事毛よりも細し
車輪を運轉すれば、一夜の内に百里を走り得べく、船艦に使用すれば

蒸氣機関
たるなり
實用の文
の注意に
も可なり
重きを以
てしむる
實用の文
味の趣及
味の趣及
なるも意
なるも意
成る二大
要素の形
及内容の
科學書も
敘事文の

數月を出でざるに地球を周り得べし、人は是によりて文明を進め、國
は是によりて富強を増すべし、水の功用も亦廣くして且大なる哉。
實用的の敘事は、文の上よりも其用うべき範圍、例へば前例の如き、水の効
用を説きて人に知らしめんとする場合に、遺憾なく其効用を示すべく、結局
意を達する事に重きを用ふべきものあり、其結果は自然實用を主とする事と
ある譯にて、文に必らずしも趣味あらしむるを要せず、寧ろ乾燥無味あるが
此種の文章の特色ありとす、従つて文章を形成する所の二大素、外形(文飾)
及び内容(思想)を比較して、孰れに重きを措くかといふに、無論内容を重し
とせざるべからず、科學書の記述の如きも亦此種類に屬すべきあり。

◎敘事文作例

木立物古
りては樹
木樹着た
るをいふ

いはん方
ないとは
何ともい
ひはうい
いほふい
いほふい
事なり

春のくれつがた、長閑やかに艶ある空に、卑しからぬ家の奥深く、木立物古りて、庭に散り萎れたる花見過しがたきを、さし入りて見れば南面の格子皆おろして、寂しげあるに、東に向きて、つぎ戸のよきはとにあきたる御簾の破れより見れば、容貌清げある男の、年二十ばかりにて、打解たれど、心憎く長閑やかある態して、机の上にふみを繰り擲げて見居たり、いかある人ありけん、尋ねきまはし。(徒然草)

●月夜廢寺を訪ふ

藤原定頼

八月十七日の夜、いみじく月明かりしかば、内に参り侍らふに、大殿をどおはしまして、女房をどに物いはんも便あかりしかば、南殿の御前に行て月を眺むるに、夜いたく更くるまゝに、いはん方をし、藏人

何處いみ
しく面白
かからん
何處が一
番面白
かといふ
事なり

たどるた
とる通り
くど同
じ意味也
燈寺の光
景を被て
たるに
此處は
景の文な
り

元仲を呼びて、今宵の月何處いみじく面白からん。歩かばやをどいひて、まづたゞ車に乗あんといひて、廣澤面白からめ、其方行かんといひて行くはどに、二條にて西さまに見遣りたる、更にいはん方をし、門をもの見え續きたる、八省の門の樓の上ばかり、唯はのかに繪に書けると見ゆ、嵯峨野過ぎてかの寺に行き着きたるに、所の様げにいといみじ、西なる僧坊も人も住まず荒れたるに、月を見出したるに思ひ残す事なし、いたく破れたる反り橋、たどるく渡りて、堂のもとに行きたれば、皆あけて人もなし、月の影に見れば、皆金色の佛見え給ふ、あはれありとは世の常あり、長押のもとまで秋の野よりも繁く草生ひ、虫の聲ひまふし、いみじくもあるかあと、いひ合せて後方ある山の東に、鹿の唯一聲啼きたる、物おぼえずいはん方をし、更に今宵

祐成範長
二人は伴
者なり

鐘突けば
雲の鐘の
鳴りたる
事なり
はるく
透るかに
しつや
廣き光景
をいふな
杜は森の
事なり

は歌詠むべき方よし、何事をすべきにもあらずをいふ程に、さりとて亦無下にてあらんも物狂はしく、唯しのびてはやむともとて、かくいふ、『み草ひく人しきければ水の面に、宿れる月も澄みぞわづらふ』祐成、『山の端に入にし月はそれながら、あがめし人を昔よりける』。範永『すむ人もあき山里の秋の夜は月の光も寂しかりけり』『年経れど秋もどまらぬ水の面に幾夜か月の澄み渡るらん』かくいふほどに、曉にかりぬるにや、鐘突けば歸りぬ、嵯峨野より東さまに車をやりたるに、西に傾きたる月の、水の面を照したる、はるくとして目の及ぶべきにあらず、露おき渡りたる、西は小倉山、東は太秦の杜を際に見ゆ、池の上の月といふ詩を誦して過ぎし程は、思ふ事少し忘れたりき。

津の國は
攝津國を
固とは其
國の領主
となりし
赤松光範
は則村の
子なり
左馬頭正
儀は楠正
成の三男
の正行
河内は越
え河内正
儀は河内
に領す故
に打ちぬ
は打ちぬ
は打ちぬ

●熊王丸の事を記す

隱士 松 露

大夫判官赤松光範が、津の國の固めありける時、左馬頭正儀に、度々謀られけるを、口惜しく思ひ込めて、過し侍りけるに、去ぬる住吉の戦に討たれ失せし宇野の六郎といひしが子に、熊王といひけるが、まだ幼き時、光範にいひけるは、正儀は我が爲にも親の敵にて侍へば、如何にもして討ち侍らん、河内へ越えて、正儀に仕へ侍らんに、幼く候へばあどか心を許し申さぬことのみかるべき、たとへ心を許すことの待らずとも、七とせ八とせはとも仕へ候はば、其内には打ちぬべきたよりの、いかでかからむ、御暇をこそ給らめと、涙を流せば、光範もいと憐れと思ひながら、幼ければ、敵の國へ遣らんも心許さし、又は

き事に使
宜機をいふ
物を大い
くはく入
るといふ
事年の長
ずる事
いふ事
阿倍野
源氏
家死の
古戦場
兵庫介
元正儀
の臣なり
熊王ま
奇計を以
て忠元に
情を同
たるなり

命に代りて討たれしものゝ子なれば、紀念とも思ふべけれど、強ひて
とどめ玉ひけれども、少しくおとましくありまば、よも近付け給はじ
幼くありまん時参りてこそと、切りに望みければ、力及び給はで、常
に放ち給はざりし、刀を賜ひて、是にて本意遂げよとて、阿倍野まで人
數多添へてやらせけるに、夫よりは等しき童一人を具して、赤阪の城
に行きて、そのはどりに佇立みてありけるを、兵庫介忠元が見つけて
如何ある人にやおはすらんと尋ねられて、我は太夫判官光範のさふら
ひにて、宇野の六郎といひけるものゝ小子に、熊王といへるものにて候
へ、父にて侍べる六郎は、去時住吉の戦に討たれて候を、一門にて侍
る備後守が、我を追ひ討ちて、領地を奪ひ候へども、光範と心を合せ
候へば、詮方なくて、如何ある寺へも入り侍りて、僧法師にもあり、

忠元正儀
に熊王た
披露りた
熊王正儀
の徳に化
心て以て
徒ふに至
りたるな
少なる
所を知ら
ずの如く
許すとい
ふや、い
ふ事ある
恥ある一
士恥は武
士恥は武
可恥は中
るにあり

父の跡を吊ひ候はんが爲に、漂へ侍るといひけるを、あはれと聞き
て、まづ我が方に伴ひて、さまざま勞りて後に、正儀にありつる事を
語りて、幼くは候へど、心の賢々しくてまど申すに、あはれがり給ひ
て、召しよせ給へり、固より情ある人ありければ、熊王も思ひつきて
親の仇をも忘れにけるにや、よく宮仕へにけり、十五ほどに寄りけれ
ば、河内の國にて、少しある所を知らんといひけれども、耻ある一矢
をもいさふらひてこそとて、辭しにけり、あくる年の春、父が七回に
常りけるに思ひつけて、今宵正儀を討つて、父の手向にもし、光範の
心をも安め奉らんと思ひたちてありけるに、其日御前に召して、今日
は吉日にてあるなれば、元服せよかしとて、和田和泉守に髻とりわけ
させて、和田小次郎正寛と名乗らせ、吉野殿より給はせける鎧を給ひ

和名附泉
守野殿と
親野殿と
吉野殿と
朝野殿と
に御所を
に御所を
野殿とい
ふ

覺東なく
思ひ玉ふ
は何事な
ふ事と思
ふ事と思
ありつる
心の中を
心の中に
秘

めつき打
正儀の打
つ時ふ
事なふ
行ひてあ
りけり
す即ち出
家の道守
正事なく
ありし正
儀と討た
ん事得て
り事得て
いふ事な
かへさば
かへさば
の要るさ
かへさば
意味なり

ければ、涙を袖にかけて悦ぶ、夜に入るまで正儀の御前に在けるが、
又不圖思出で、打奉らんあれば、今宵こそと思ひて、膝をおし直して
正儀に目をかくれば、年頃の情深かりしこと、今日の元服の事を思
ひ續けて、いかで情なく打奉らんと思ひ返して、心を鎮むれば、父の
敵といひ、譜代の主君の仇といひ、一方あらねばと思ひ定めけれども
何心もなく渡らせ給ふありさまを見ければ、御痛はしくて、耐へかね
けるにや、廣縁にいで聲をあげて泣き叫ぶを、人々も正儀も、覺東あ
く思ひ玉ふて、障子を開き見給へるに、伏し沈める態の、たゞには見
えずありければ、如何にやと問はせ給ひければ、ありつる心の中を申
して、とに角に君の爲、先君の爲、父の爲に、自ら死さんより外は候
はずとて、刀を取り直せば、ありつる人ども、皆涙にくれてありしが

ら、いかでさはあらんと、取付きて働かせねば、力及ばてその刀にて
警押し切り、往生院にて形をかへ、君より給はせる名あればとて、
正寛法師とぞいひける、寺の傍に草の庵を結びて、若しも心の變る事
のありもやせんとて、往生院の門の外へは出でずして、行ひてありけ
り、光範より給はせける刀は、ありし有様を委はしく書添へて、返へ
しけるとかや、いと哀ありける事にこそ。(吉野拾遺)

●時 雨

本居宣長

十月の始、物へ行きけるに、日いとみじかき頃、やゝ遠き所にし有け
れば、急きつれど、かへさはと暮れにけり、夕月の影に玉篠の霜の
所狭くおき渡したるが、さらりと見へたるを、中におかしき、冬

山の端を
隠れ月
の端は
自然に
沈むた
た然道
で時雨
降りな
り降る
り空に
は地を
つ如く
が如く
はゆか
るてい
思宿る
木がの
を木の
り代な
りとな
す

枯の野邊の景色、暗あらしかば、口惜しからまほしと思ふにも、入方近く微ある光の、いと厭ぬ心地するに、空へ劇かに曇りて、山の端から月も隠れ、いみじう暗くありて、風あらくしく吹ぬるは、げに定めなき此頃の空の景色かきと見るに、端なく打ち時雨來ぬれば、足を空に走りかへるほど、しどよに濡れぬ、何とはわかぬぞ、いと大なる木のたてるを見付けて、暫しの傘宿りと頼む蔭さへ、いたくちりすきにたれば、雨たまるべんもあらぬにぞ、いとわりなきわがさありける、しばしのはごに名残もなき晴ぬれど、月は早く入りにけり。(餘の屋集)

以上擧げたる數例は、即ち敘事文の美文にして、中古平安朝時代より、近古鎌倉時代、近世徳川時代に於ける雅文のみあり、されど此數例に就いて熟讀

敘事文の美
文の雅文
何故美的
實用敘
事文の例

せば、孰れも敘事文の事實事象若くは景物を客觀的正直に記述したるのみにて、他に批評眼を加へず、論鋒を加味せず、一圖に事を記すを見るべし、然も皆多少美的文字と趣味的佳句をも集めあるは即ち美文にして、美文の項中擧げたる敘事的美文と同一體のものあり。
別に實用的敘事文を示せば左の如し。

蜂

小蟲類にて一群をなし、階級も職分も分れて棲息するは、蟻類の外にては蜂類あり、蜂は其性猛烈にして、尾端に有毒なる針あり、黄蜂と蜜蜂とに大別し、其種類多し、種類によりて、巢の構造も、其習慣も亦各同じからずとぞ、群集する數の多きは、一萬以上に及べるもあり

一つの巢には、必らず蜜公、蜂王、工蜂の三種あり、蜜公は蜂仔の父にして形大く、飛ぶ時は高さ聲を發す、其性甚だ怠惰あり、蜂王は蜂仔の母にして、蜂巢を管轄し、衆蜂是に従ふ事衆蟻の蟻王に従ふ狀に似たり。『蜂王若し斃死するときは、衆蜂狼狽して擾れ騒ぐが中にも、其死を見出したる蜂は、宛ら狂せるが如く、巢の周圍を飛廻りて、同類に逢ふ毎に小鬚を觸れて、兇變を報ずる事を怠らず、五時間ばかりもかく擾れ騒ぎたる後、更に工蜂の兒仔を入れて、蜂王と定むといふ。』蜂王の散亂するは、其數多くして、一季に六七萬を生むもあり、一つの蜂巢には二つの蜂王ある事あり、その卵子は蜂王とあるも、蜜公とあるも、工蜂とあるもあり、群蜂、巢より外に出る時は、蜂王是が先導するを常とす。『蜂の蜜を貯へむがために、密窩を造る方略と、熟練

工蜂は蜜
蜂の仕事
をする職
工といふ

蜜公とは
蜜を貯へ
る穴なり

にして怠らざるとは、實に驚歎すべきに堪へたり。巢中の群蜂、花を採らむとて出行くを伺ひ、他の蜂若くは蛾などの巢を襲ふ事を以て、夜も番兵を出して其巢を護らしむ、若し近づくものある時は、番兵の蜂は、一聲高く唸りて之を報ず、群蜂其聲を聞けば突進して之を防ぐとあり。『又蜂の屬中には、自ら勞力して其巢を作り、獨居するもあり粘土にて造れる四五個の蜂房に、卵子を生むもあり、又古き材を以て、深さ一尺ばかりの孔を穿ちて卵子を生み、出入する口を塞ぎて他の來襲を防ぐもあり、又樹の花若しくは葉を以て、其巢を覆ふもあり、又地中に孔を掘り、綠葉をもてかくすもあり、その巧妙なる事筆に寫さむやうもあらず。』

信濃國は
日本第一
の高地な
り

蟲蟄せず
とは冬季
は且蟲類
はすべて

●日本の地勢と氣候

楠 春 暉

日本は一の島山にして、其島山の絶頂といふは信濃國あり、夫より四方へあたれ下り、東西の國あり、南北の國あり、南面北面をれくの向々あり、薩摩、大隅、日向の地は、甚だ南にありて、最も暖氣の國あり、雪、霜、氷の類は、其方角によりて、全くなき所あり。夫故、彼の地如何なる高山深谷といへども、三冬にわたりて雪ある事なし、又人家に火燧といふものなく、足袋頭巾の類用ゐるに及ばず、尤も冬は天氣常に晴朗にして、風も強からず、此故に冬も蟲蟄せず、蜘蛛、蚊、蛇、虺の類四時あり、亦草木も是に應じ、蘇鐵、蘭の類も自然のものあり、人家の庭にも、直ちに植へてよく繁茂するあり、冬上

穴を造り
て其中に
蟄居すさ
れど暖國
は氣候暖
き故そな
なきいな
り

り花咲く櫻あり、梅も落葉せず、葉ありて花咲く、葉と花を一度に見る事は珍しき事あり、橄欖、龍眼皆實る、松竹よく榮ゆ。北國は是と異りて、高山深谷は四時雪消えず、冬は氷柱軒端に下りて水晶簾の如く、氷厚く、堅き事玉石の如し、大河急流と雖も、皆氷りて車馬氷上に往來す、此故に足袋頭巾、冬春の二季は暫くも離すべからず、火燧のみならず、圍爐甚だ大にして、晝夜盛んに火を焚く。又九十月の頃より春三四月の頃までは、毎日毎夜、天氣曇り雪降らざれば雨降り霰あり、北風亦常に烈しくして、面を向けがたし、此故に秋、冬、春は、蟲絶えてまじし、夏も甚だ少し、草木も生育あしく、其種類も南方よりは甚だ少し、竹絶えてまじし、松も亦甚だ稀あり、梅、櫻、桃、山吹、藤、躑躅、梨、李、石榴など、雪消えて後に花開く、故に皆四五

月の頃に一樣に咲くあり、梅は若葉いつると花咲くと一時にして、葉花を一度に見る、南國の梅は葉おちずして花咲き、北國の梅は葉いで花咲く、氣候の相違はかくの如し。

●柿

柿も東洋のみに限れる植物にして、近頃に至りて漸く西洋にも移植しつれば、いつか世界に遍く出来るやうにある時もあるらむ。柿の實は八枚若しくは十六枚の心皮の合ひて成れるものあれば、その種子の數も八枚若しくは十六枚あるべき理されど、一果の内に成熟せると然らざるもあるを以て、成熟せざる所には、種子の備らぬもあるあり、種子の内には一の胚あり、是柿の木とやらむ萌芽あり、その周を圍める色白

胚とは種子の内部

にあるものにて是より前を出す胚胎などいひて生ずるかいふも是によるなり
黒柿など稱して器具用に重んぜらるるもの即是なり

き所は即ち、此萌芽を養はむ物質にして、是を胚乳といふあり。柿の實の中に、あまたの澁ある事は、世人の知れるが如し、此澁はマンニソ即ち鞣酸とか云ふものあるとぞ、マンニソは砂糖に變化せむ性をもてるものあるが故に、實の成熟するに従ひて、漸く澁み少くなりて、終には甘みとなり、變るものあり。その幹は色黒く、質堅くして家屋に用ゐ、器什に使ひて人に重せらる、かく色の黒さは、其始より然るにあらず、此木の生活せむ作用を失へる所より、かく色づくるものあり、されば柿の木を切倒して、横より之を見れば、黒める所と、然らざる所とあれど、倒したる後、長く之を棄置く時は、漸くに色きて、全く黒くありぬべし、極若しくは檀といふ木などの色づけるも同じ理あり。

●海牛及鯨

海牛は又海馬ともいひ、多く沖繩近海に産す、土俗是をサンと呼べり此獸の水面に頭のみを現すときは、其態人に似たるを以て、古來海女人魚などの稱あり、長さは五六尺にして、頭圓く、尾は鯨類の如くにして、胸部に大なる一對の鰭あり、全身鼠色にして、粗毛を生せり、此獸は常に水中の魚族、又水草をも食ひ、或時は陸に上る事あり、肉味頗る佳良なれば、人は是を貴重せり、鯨の尾あり鰭ありて、其形体は魚に似たれども、海牛、海豚、一角魚なども、同じく水中に栖息する獸類とす、其一是鯨鬚をくして、齒を有すれば有齒類といひ、其二是鯨鬚を有して、齒をければ無齒類といふ、されば逆戟鯨、眞甲鯨、海

金華山沖
は陸前國
小笠原島
は南洋に
近き海洋
中にある
群島なり

豚、槌鯨等を有齒族とし、背美鯨、鰭鯨、兒鯨、長須鯨、座頭鯨等を無齒族とす。眞甲鯨は、尋常の鯨より形小なれども、頭部巨大にして、臍脂多く、此油より精良なる鯨油を製し得るを以て、漁夫は大に是を貴重すとあり、金華山沖、小笠原島の附近に、まゝ多く群り來るを以て、漁船は一時に數頭を捕ふる事あるあり。背美鯨は身の長四丈乃至七八丈許もあり、皮膚は黒色にして皮厚く、頭は軀軀の三分の一はゞにて、口甚だ大あり、然れども此族は、齒なき故に、眞甲鯨の如く、大なるものを食することなく、たゞ僅に小き蟲魚の類を餌食せり其餌食する状は、食はむとする所の蟲魚を、先口を張りて、海水と共に口中に含み、然る後に口を閉ぢ、海水をば鯨鬚の外に押し出し其跡に残りたる蟲魚のみを嚙下するあり。

◎世界の人類

蒙古人種
は日本人種
の支那人種
及印度人種
の南支那人種
又及南支那人種
の南支那人種
又及南支那人種
の南支那人種
又及南支那人種
の南支那人種

蒙古種一名黃人種は、亞細亞の東半部及其北境に位す、亞米利加洲
歐羅巴洲の極北大洋洲の北境にも間々亦此人種の位するを見る、此人
種は皮膚黄色、又は褐色にして、頭面半廣し、頭顱圓く口大にして、
鼻低く、眼長ふして狭く、頭髮黒ふして疎あり、高加索種一名白人種
は、全歐羅巴洲、亞細亞洲の西半部、亞米利加洲の北部を占領し、亞
米利加洲及び太平洋洲に繁殖す、此人種は皮膚白色にして淡紅を帶び、
頭顱楕圓にして、眼大に、鼻隆ふして口小に、唇薄ふして齒直列し、
頭髮纖細にして間々捲縮す、其他赤髮紺腫は特り此種のものです。『亞
米利加種一名赤人種は皮膚銅赤頭髮黒ふして鬚髯疎に、眼大にして面

の總稱に
して更ら
に是をチ
ユートン
族スラア
族マラア
族などに
別す

實用的敘
事文の近
體文
實用的敘
事文の時
代的文章
なり

廣し。『馬來種は亞細亞東南の一小部、太平洋洲の西部、亞弗利加洲殊に
馬達加斯加爾に繁殖し、皮膚棕色或は暗赤にして顔面平廣に鼻偏ふし
て口大に、頭髮黒く長くして光澤あり、亞弗利加種一名黑人種は亞弗
利加洲の中部より南部に繁衍し、此人種は皮膚黯黒間々灰白或は黃褐
にして前額偏く圓突出して唇厚く、齒長ふして口大に、額高ふして鼻
低く、頭髮漆黒にして捲縮す。

這是實用的敘事文にして、茲には専ら近體文を抽出したるが、それは敘事文
の實用的は近世以前には多からずして、多く雅文若くは俗文美文なる故、殊
に實用的は、單に其時代に適合してのみ必要なるもの故、古代の作例を抽き
て示したりとて、勞多き割に功少し、されば現代の如く、百科の學盛んにし
て、實用的敘事文の必要ある世には、従つて此文體も亦現代に多く取る方勝

近體敘事
文作例

言文一致
の文例

栃木の鎮
守とは田
中正造翁
家世を栃
木にあり
て同郷民

れりと思惟したるにより、茲に其一斑を示したり。
是より近體文の作例を載すべきも、美文の敘事は美文の項中其例を示しある
により、今茲に載するの要なし、然して實用的の近體文は前例五六載せある
により、亦茲には是れを除きて、更らに言文一致に移り、それより記事文例
を示して以て本章を終る事とせん。

●田中正造翁の住居を訪ふ（日本新聞）

議會の名物、栃木の鎮守、田正翁の家はどんぢであらうか、餘人は知
らず、余はかゝる男が如何なる地から出たかを見る如く、佐野に滞在
中、或る日其家を訪ふた▲佐野からは一里許りの在所、車上豊稔の稻
田吹く風すゞしきを浴びつゝ、秋山川を渡つて、翁が村へ這入つたの

の爲めに
殆んど身
を犠牲と
して竭す
故に是を
崇めて鎮
守とす

は夕方であつた▲村の入口、杉の生垣の下ゆく清き流れに大根を洗つ
てゐる女がある、田中さんの宅はと聞くと、今は留守だらうと答へて
切々大根を洗つてゐる▲少し行くと、貧乏徳利を提げた小供がやつて
來よる、田中さんの家はと聞く、眞ッ直ぐに行つて郵便函のある所だ
▲摩利支天か將た觀世音か、とも角も古く壞れかゝつた辻堂がある、
椽に梅干婆さんが綿入の古いのを解いてゐる、老眼鏡越しに余を見下
ろしたのを幸ひに、故意と田中さんの宅はと聞く、其處だんべいと前
の家を指す▲勿論翁の留守ある事は先刻御承知の余である、車を下り
て家の外面を見めぐらす、但し忍び込む用意ぢやまい▲二間ばかりの
格子に一間の入口、二階の格子窓は歪みかゝつて、破れた二分ツンの
洋燈が片隅に置いてあるのが見へる、全く是れ田舎の貧乏店である▲

閻を跨ぐと、土間の右手に地機が一基、今しも六十許の老婦人が其れに腰かけて、木綿の白地の織物をトン／＼と織つてゐる、其傍に米俵が十数俵積まれて、下の處に大豆が蓆に撒かれてある、又機の上の方には、天井から鶏の啼が一個の古瓢箪と共にぶら下つてゐる、槌の音がスル／＼カチン、機音がトン／＼、雄鶏コツケコツコー▲正造さんはと聞けば、老婦人は槌の手を止めず、ふりかへりもせず、三年も歸りませんよ▲おかみさんは、ハイ此正月から歸りません▲おかみさんは何處へ、大方被害地でも歩いてるでしやう▲それではあなたは一入留守番してゐるんです、あれらが歸つたつて用はありませんかからハ▲依然其機の手は止められず、さうして余は邪魔物扱ひにされてゐるのだ▲店の鹽梅を注意して見ると、火鉢が一つと梁に張つた古き錦

トルスト
 イーは露
 國現代の
 大文豪に
 して伯爵

畫の外、他の一物を見出さぬ代りに、店も茶の間も奥の居間も座敷も、悉く見通される、斯かる公然隠すなき生活は、よく田舎にある圖であるが、此處は又一層だ▲此時四五羽の鶏が、パタ／＼と羽ばたきして、老婦人の頭上、啼の内へ這入つた、老婦人驚いてコラ／＼と呼ぶ、余は閻を外に出た。

●トルストイー伯五十年の祝賀

中島孤島

千八百五十二年にカウカサスの軍營であつた、トルストイー二十四歳の作『幼年』より數へて、丁度五十週年に當るといふので、去年露西亞の文學者、美術家、社會改良家の社會は、翁の爲に盛なる祝典を擧げた、夫は翁の病氣一時は危篤とまで傳へられた▲全快の報は更に

の爵位を
有す

一層の景氣を添へて、翁に對する頌徳、讚美の辭は至る所に揚つたこと。『多くの新聞雜誌一様に翁の稀ある天才を讚え、一方には過去の功績をあげると同時に、他方には翁が將來の事業を豫測し、假令翁の宗教や倫理や、政事上の意見には、日頃から反對した人達でも、藝術家として、博愛家として、正義人道の使徒としての翁には、何も多大の價値を拂つてゐる。』現今の文壇に盛名ある批評家ミカイロフスキは月刊“Rouskaye Bogotivo”の誌上で、斯う言つてゐる。(中略) 此外多くの新聞雜誌の評は、何も大同小異であれば、夫等は別に擧げずとも、露西亞の國內に於ける、此老大文豪の尊敬のはゞは略察しがつかう。

●奥州の兎狩

鳥谷部春汀

奥州で狩獵といへば、雉子狩と兎狩に限るやうである、鳥類でも鴨、鳴、鶉などもゐるやうだが、其數が少いから、狩師は是等に目を附けまい、狩獵の目的物は兎と雉子の二種である、お正月の御吸物には兎離羹には雉子と極つて居つて、歳暮や年頭も贈物にも大抵此雉の二種を用ゐてゐる。『雉子狩には鐵炮と獵犬が入用であるが、兎狩には罾が入用である。此兎狩はちか／＼趣味ある奥州の遊戲で、冬季降雪の頃より追々始まるのである。』兎狩に使用する罾は、長さ十間、幅一間位のものが多い、太き麻糸で編むたもので、獵夫は成るべく人數の多い方が宜いのである。『獵場は麥畑か豆畑で、山林には兎が居ぬやうで

ある、兎狩の方法はといへば、至極無雑作であるが、多少滑稽の點もある。』先づ一方に如上の唇を張つて、左右兩側に見張番を附けて置く次に大勢の獵夫が唇向ふの一方より鬨の聲を揚げつゝ、棒切で藪を亂打しつゝ、唇の方に兎を狩り出すのである、雪の中を草鞋わらじで、喚おほき叫んで、躍り狂ふ狀は實に奇觀と謂ふべしだ。』兎の多い地方だから、一畧おぼに時として十頭以上を獲ることがあるから、一日の狩獵に五十乃至七八十頭の獲物があることが珍らしくない。』兎狩の季節は、丁度農作物藏入の濟む後だから、農家の子弟は兎狩を唯一の娛樂とし、又兎の買上代を冬季最大の収入ともするのである。』地方紳士の中にも、随分兎狩に熱中するものがあつて、十二月の中旬頃より翌年二月頃までは、兎狩が奥州紳士間の流行である、それに兎狩といへば、別段技術

「オセロ」は英國王
朝時代の
キプロス
五大悲劇
中の一つ
なり
島は伊太
利に

を要せぬから、どんな素人でもできる。』他の狩獵に比すれば、兎狩は共同的であるから、所謂衆と俱に樂むといふ趣意にも叶つてゐるやうだ、但し雪中行軍の体があるから、途中で俄か雪の爲に困難することもあり、東京邊の狩獵家の想像し得る所であらう。』

●悲劇オセロの起原

長谷川天溪

オセロ物語は、シニークスピヤの案ではない、是は伊太利の小説家キラルヤ、シンチオの「ヘツカトムミチ」から借りたのである、夫は千五百六十年シ、リー島で出版された書で、其概略の筋は次のものである。』ヴェニス府に剛勇無雙のムーア人があつた、此人は武勇に長じた爲に、多くの人の尊敬を受けた、所がデスデモナといふ絶世の美人が

地中海
にあり
グエニス
府は伊太
利の都市

サイプ
ス島は地
中海の東
端亞細亞
に接する
所あり

第二編 散文 第三章 敘事文

此の色の黒いムアー將軍に戀慕した、もとより生白い男を慕ひたがる乙女の心からではなく、全くムアーの氣高い氣象を愛したのである。ムアー亦此美人の愛に酬ひ、デスデモナは親族の故障あるにも係らず此將軍と結婚の式を挙げた、所で此物語中には、たゞムアーとある許で、何といふ名も附けてない。『偕て兩人は陸しく暮らした、やがてムアーは、サイプニス島の司令官に任せられて、赴任する事とあつた、此時ムアーは身近く使つた旗手を連れる事にあつたが、此旗手は容貌こそ美しけれ、心は正しくなく、高慢で然も怯懦な男である、是が日頃からデスデモナを戀して居たのだから、デスデモナはムアーの外には男の方には見向もせぬ、されば戀は變んじて恨となり、遂にデスデモナに不貞の罪を着せてやらうといふ恐しい念を起した。』ムアーの旗下

セキス
は英國
エリザ
ベス朝
の詩人
大詩人
以前三
百年の
以て英
國人の
なり英
國人の
のオク
ソクド
フオク
ソクド
に生れ
て大長
に作ら
れた狂
言者と
して専
ら創作
の事と
し、其
名に終
な

に一人の武官があつた、旗手は此の武官とデスデモナとが、密會すると言ひ觸さうと思つて、さまざまに計畫をめぐらしてゐる折しも、此武官が保護の兵士と争闘して、相手に傷を負はしたといふ事件が出来た、デスデモナは其武官の爲に、オセロに謝罪する所があるや、此處ぞと旗手は、兩人が怪しいと吹き込み、更にデスデモナの肌身を離さなかつた手拭を盗んで、武官の部屋に取り捨て、置いた、ムアーの怒は一時に發し、直に旗手と共に、兩人を殺さうと謀り、旗手は武官を闇打にかけて、傷を負はせ、ムアーは靴足袋に石を詰めて、是でデスデモナを撲り殺した、兩人は其罪惡を蔽はんため、天井を外づし落して、デスデモナハ梁に打たれて死亡つたといふやうに見せかけたがムアーは其時既に取り上せて、旗手を放逐した、旗手は是を怨んで、

第二編 散文 第三章 敘事文

英國文學史中第一位におか
るの榮りたる人なり

殺人罪の顛末を法廷に訴へた、ムアーは捕縛され、詰問され、拷問に懸けられ、追放の刑に處せられたが幾許もなく、デスメモナが親族の手に殺された。

敘事文の作例は、概略まづ是にて擧げする事とせん、敘事文あるものは、多く作例を載せずとも、すべて、傳記、紀行、論文等を除きて其他は皆此中に收容すべきものあれば、諸君が日々見る所の、新聞などにては雜報といふものは、皆敘事文なれば、就いて見るべく、然してたゞ事實に到達する事の一事を忘るべからず。

第四章 紀行文

紀行文とは如何

紀行文は同じく散文の一體にして、是を嚴重の意味より類別せんには、敘事

紀行文は一體なり

文といふものに外あらざるあり、紀行の事を敘する文にして、たゞ其記敘の範圍自から一定の域即ち紀行といふ部分のみに留る爲、爰に一體、一類を形成して、便宜上類別したるものあるあり。

紀行文と美文
紀行文は實に於て實用の趣味あり故に美文多し
紀行文は事實以上にて超脱して美化す

されど、紀行文は其性質に於いて、多く實用的ならずして趣味的あり、旅行の趣味ある事、紀行の愉快ある事を敘して、是を讀むものに同化せしめ、然して徐ろに讀むもの自身に其趣味及愉快を享受せしむるを肝要とす、是に於てか紀行文は、文そのものゝ性質及目的に於て、是を詩化し、是を美化し、あらゆる形容と文飾の許に、章句を添すべきものあれば、文の質たるや、全然美文あり、乾燥無味の生硬なる文字を列べて、理屈に陥るべからず、さりとて又平凡々々、單に事實を記載するを以て甘んずべきにもあらず、事實以上にて超脱して、無味の事も有味とあすの手腕を要す、例へば東京といへば、

るを要す

單に事實上の地名をれど、是を鷓鴣東といへば、事實を距る遠けれども美的とあるあり。是は實用文にては通せざるのみならず、甚だ迂遠とあるの嫌あれど、美文としては、かくあらねばならぬ譯あり、尙詳しき事は美文の章を参照すべし。

是を要するに紀行文は、紀行といふ一小範圍の事象を目的として綴りたる美文あるあり、多く説くを要せず。

尙以下に於て作例を示すに當り、既に古文 雅文の例は、種々引用して、略其體を會得したるあらんと思惟するにより、是よりは古文雅文は其二三例に止め、學生に適應して、直に習得の便を得せしめんが爲、多く近體文を載する事とせり、そは他とし、紀行文、傳記文の如きは、學生が普通作成する文にして、作例中尤も注目し値するものあらんと思ふての故あるあり。

紀行文の定義

紀行文及傳記文の必要

紀行文以下は近體文を多く載す

紀行文作例

京にて云々、或は京
都山城の
京は當時
京都のさ
京都のさ
立云々の
此頃に出
任に土佐
任に土佐
期に満ち
時に歸る
死に女へ
たへに引
るに返る

◎紀行文作例

●土佐日記の一節

紀 貫 之

廿七日大津より浦戸をさして漕ぎ出づ、かくする中に、京にて生れし女子、國にて俄に失にしかば、此頃の出立いそぎをみれば何事もいはず、京へかへるに女子のあきのみぞ悲しみ戀ふる、ある人々も得耐えず、此間にある人の書きて、いたはる歌、「都へとおもふも物の悲しさは、かへらぬ人のあればありけり」又ある時には「あるものと忘れつゝ尙亡き人をいつくも問ふぞ悲しかりけり」といひける間だにかごのきといふ所に、守のはらから又其人これかれ、酒をにぞ、とて追ひきて、磯におりて別れがたきことをいふ、「かみの館の人々の中に